みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

制度としてのソビエト民族学：民族学理論の位相と歴史主義の可能性：ロシア民族学に於けるエトノス理論の攻防—ソビエト科学誌の為に—

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡邊, 日日 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001246

高倉浩樹・佐々木史郎編『ポスト社会主義人類学の射程』
国立民族学博物館調査報告　78:65-109(2008)

ロシア民族学に於けるエトノス理論の攻防
――ソビエト科学誌の為に――

渡邊　日日
東京大学

本稿は，ロシア・ソビエト民族（誌）学の流れでエトノス（*etnos*）概念がどの様に用いられたのか，その理論的軌跡を追う。先ず，「固い核」と「防御体」の考え方（ラカトシュ）を暗示として，ある理論体系を記述する時に留意すべき枠組について考察する。第2節では，ティシュコフのエトノス理論批判を見て，彼が主張する「国民＝市民」論が政治思想としては理解し得るが，ソビエト・エトノス理論の骨格を揺るがす理論的批判にはなっていない点を指摘する。第3節ではシロコゴロフのエトノス概念を検討し，環境やエトノス間関係の中でエトノスが常に過程としてあり，極めて動態的なモデルが提出されている点を確認し，それが近代国家の諸制度と親和性を持ちにくいことを述べる。第4節では，ブロムレイが主導したソビエト・エトノス理論がソ連型民族別連邦制と強い連関を持ちながらも，歴史学や社会学とのディシプリンをめぐって民族学の自立性を保ち，ソ連体制を批判する論理的可能性すら秘めたものであったことを結論付ける。

1　問題の設定
　1.1　はじめに
　1.2　ソビエト民族学と民族をめぐる問題構成
　1.3　本稿の構成
2　ティシュコフによるソビエト民族学及び民族理論批判
　2.1　批判の矛先
　2.2　民族から国民へ
　2.3　民族学の民族問題研究への転換
3　シロコゴロフのエトノス論
　3.1　民族学の基礎問題としてのエトノス概念
　3.2　エトノスの定義
　3.3　過程・環境・適応
　3.4　エトノスの環境と制度
4　ブロムレイのエトノス理論
　4.1　エトノス理論にとっての「固い核」とブロムレイの意図
　4.2　ブロムレイのエトノス理論の骨格と特徴
　4.3　個人という問題構成と民族（エトノス）社会学，そして攻防戦の一つの帰結
5　終わりに

＊キーワード：エトノス理論，ソビエト民族学，シロコゴロフ，ブロムレイ，ティシュコフ

1　問題の設定

1.1　はじめに

学説と社会構造との関連という問いは，決して新しいものではない。学説という名で

呼ばれる世界観や見識，視座というものが，様々な社会的脈絡から遊離した客観的な真理であると無邪気に見なす態度は，例えばK・マルクスにとって宗教やA・スミスの国民経済学が，単に取っ払ってしまえば済む「阿片」やイデオロギーなのではなく，認識のメカニズムを内包した社会的実践そのものであり，それゆえ新規に社会的実践を認識するには，全く別の理論体系（弁証法的唯物史観）を当の社会的実践に再インストールしなければならないとされた経緯を思い起こせば，既に19世紀に懐疑の目を向けられていたと言える。また20世紀の科学社会学は，人文・社会科学は言うまでもなく，自然科学的発見に於いてすら，当の科学者が置かれていた「科学の共和国」[1] と称される学会・学界の中での人間関係から始まり，マクロな政治的・経済的情況に至る色々な意味での環境の中で，そうした特定の環境に於いて初めて，科学的発見が成立するメカニズムを暴いて見せた。少なくとも，学説と社会構造とが無関係ではなく，一定の相関性を持つという認識は，今，広く共有されていると考えて良いだろう。

だが，興味深いことに，この定説は，社会主義体制の研究に於いては，「一定の相関性」どころか，全面的相関性という色彩を放つようになっている。即ち，権威主義的であれ独裁的であれ，社会主義体制下では，学説は全面的に政府のコントロール下にあり，完全に政治依存的であるかの様に想定されているのである。確かに，ナチズムと優生学との関連を思えば，この様な想定は誤りではないと思えてくる。だが，優生学は，ナチズムでもって誕生したのでも保証された訳でもなく，19世紀からの社会進化論という大きな学的環境の１つの開花に過ぎない。ソビエト連邦に目を転じれば，すぐさま，生物学に於けるルイセンコ論争，マール言語学といった，余りにどんぴしゃりの事例が思い浮かぶだろう（メドヴェジェフ 1980参照）。どちらに於いても，後天的特性が大きな作用因となる点を強調していた訳だが，そこに，社会経済的新体制（つまり新生ソビエト）が出来ればそこでの経験内容が蓄積されて，生物であろうと言語であろうと，さらには個人心理であろうと，質的に新しいもの（つまりソビエト的，プロレタリアート的な何か）が生じる，という政治的含意を見て取ることは余りに容易である。即ち，ソ連では，学説と体制イデオロギーとの間に強い親和性があり，後者は前者を全面的に統制していた，と理解することに一見何ら問題ないように思える[2]。

成る程，科学社会学の立役者R・マートン（1961：513）は，「科学と民主的社会構造」と題する論文の中で，「現代の全体主義社会では，反合理主義と制度的支配の集中化とのために，科学の活動範囲が制限されている」と記している。明らかにソビエト・ロシアの事例を念頭に置いてこう述べて，マートン（1961：507）は「民族至上主義とかたくなな国家的忠誠の傾向が，科学的妥当性の基準そのものにまで滲透する傾向」を指摘する。確かにそう間違った観察ではないだろう[3]。しかしゼロ＝サム的思考は，他の多くの場合と同様，余り意味がない。「科学の活動範囲が制限」されているのならば，どの様に，どの程度，制限されていたのかを，学説と社会構造との関連性を認めた上で，

両者にある微妙な距離を微視的に析出する作業が必要の筈である。さらに言えば，単に制限の実相を政策の学説への影響というレベルで描くだけでなく，学説や理論に内在する論理の流れを追跡し，理論固有の論理がそれを超えて政策などの実際レベルに反作用してしまう様な相互性を見極める作業が求められていると考える。別に言えば，とある理論が置かれた，政治体制を含む社会構造に固有の問題構成（problematic，問題の立て方）を強く意識しつつ，それに対して理論がどういう立ち位置にいたのか，そしてどういう論理的乃至は実践的フィードバックをすることになったのかを内在的に検討する作業が必要である。勿論これは，多大な労力を伴うプロジェクトであり，本稿は，その為のささやかな一歩に過ぎない。

1.2　ソビエト民族学と民族をめぐる問題構成

上述の見解を踏まえてソビエト民族学の流れを見るとき，如何なる分析視座が有効なのだろうか。ソビエト社会主義の色彩を色濃く帯びたその学術史は，一見すると（特にソ連崩壊後に於いては）余りに無味乾燥，乃至は，教条主義に映る。つまり，ソビエト民族学のテクストは，理論武装なしにそのまま読む訳にはいかず，一定の解読コードを考案しながら，読み解く必要がある。ここで私が念頭に置いているのは，科学哲学者I・ラカトシュの議論である（ラカトシュ 1986；伊勢田 2003：97-100も参照）。ある時代の認識パラダイムの科学性を判別するに当たって彼がした工夫は，パラダイム（彼の言葉では「研究プログラム」）を，「固い核（hard core）」と「防御体（protective belt）」とに分けた点にある。新規な証拠が現れたときに後者がそれを，「固い核」が保持される形で，微調整していくのであって，新規な証拠は，修正された「防御体」を通して「新奇な予言（novel prediction）」を次に生み出していく。この過程がそのまま続く限りは，「固い核」は維持され，過程が崩壊すれば，「固い核」自体も変化を余儀なくされ，結果として，「研究プログラム」も変化せざるを得なくなる。

ラカトシュによるこの議論を，ソビエト学術史について（かなりラフに）応用すれば，次の様に言い換えることが出来る。哲学であろうと民族学であろうと社会学であろうと，ソ連の人文・社会科学にとって「固い核」とは，簡潔に言い切ってしまえば，「ソ連社会は，アメリカなど資本主義社会よりも，様々な点でより進化した状態にある」という大命題である。「ソ連では，資本主義国で生じている様な民族問題は解決された」，というのもこうした大命題の１つの変奏である。ソ連の「固い核」であるマルクス＝レーニン主義の骨格について，A・ブラウンは簡潔に５つの原理にまとめている。(1) ある社会経済体系が別の体系に代わる際に機動力となる階級闘争の原理，(2) 資本主義から社会主義へ，さらに共産主義へと不可避に進む進歩の原理，(3) 社会主義は，生産手段の国家所有・共同所有のみならずソビエト連邦で既に設立されている政治体制によっても構成されるという原理，(4) ソビエト社会・政治体系を主導し，指導する力としての共

産党という原理，(5) 社会的，特に党内生活の基礎として「民主集中制」が機動するという原理，である（Brown 2004: 4-5)。本稿の文脈で主に関係するのは最初の２つの原理であり，不動の「核」とされた。

こうした諸命題はまさに「固い」のであって，これを否定したり批判したりすることは，ソ連時代には完全に想定外である。だが，社会的現実（例えば労働者の労働意欲の低下など）や理論内の矛盾といった，新規な証拠の予備軍は存在してしまう以上，なんとかそれを「防御体」での修正でもって大命題の保持に努めなくてはいけない。即ち，ソビエト民族学（だけではないが）を解読するに当たって不可欠な作業とは，「防御体」に於ける理論構築とその修正の実相を見極めることにあるのであって，「固い核」乃至は大命題の真偽の確定にあるのではない。

私が見るところ，ソビエト民族学にとって，その新規な，外部の証拠には２つの側面がある。１つは，ソ連に存在していた民族問題である。正確に言えばそれは，民族意識の高揚，民族間の社会的格差などなど，民族が問題を起こしているという行政官や学者の認識である。もう１つは，ソビエト民族学の外部，つまり民族学ではない別のディシプリンである。新規な証拠が民族学の対象であり続けなければ，民族学自体がその知的・社会的プレゼンスを失うことになってしまう。ソビエト民族学は，社会に於ける民族や民族問題，学問領域に於ける固有の問題設定という２つの次元で「防御体」の構築と更新を行い続けたと言って良い。

この２つ目の点については詳述を要する。マルクス＝レーニン主義の人文社会科学では，史的唯物論の理論的骨格を公式化する作業領域として，経済学・哲学・歴史学が特権的な位置を占める。従って，独自の自立したディシプリンとして自らを措定するには，これらの諸学に対して，弁別的特徴を示さなければならなかった。このことは，1950年代中葉以降の，ソビエト社会学の「再興」のプロセスを見れば明らかであろう。ソビエト社会学は，ソビエト哲学，特に史的唯物論からの自立性を示そうとする知的格闘を経て，「再興」したのであった[4)]。そして，後に述べる様に，経験科学としてのソビエト社会学の「再興」は，ソビエト民族学，特にエトノス理論にとって，無関係な事件どころか，自らの存続を賭けて「防御体」を更新させなければならない出来事であったのである。社会学が民族に関する経験的データを積み上げていくとき，当然そこで生じるのは，民族に対する民族学的アプローチ（乃至は対象）と社会学的アプローチ（乃至は対象）とのせめぎ合いである。このせめぎ合いの中で，両者の間に見られる差異がほやけるとき，それはどちらかにとって固有の問題構成の領域が他方に侵犯されることを意味する。つまり，ソビエト社会学の「再興」が決定的となった1960年代末以降，ソビエト民族学の「防御体」は，ソビエト社会の民族的側面やソビエト歴史学にだけでなく，ソビエト社会学に対しても，起動せざるを得なかったのである。従って，ソビエト民族学史を検討するとき，ソビエト社会学史を無視してはならないだろう。

こうしてみると，従来の研究には幾らか不備があると言わざるを得ない。ソビエト民族学史，とりわけその民族政策との関連については，既に２つのモノグラフがある。１つは，Ｋ・クオリョークの『北方の革命――ソビエト民族学と民族政策』（Kuoljok 1985）で，この著作では，所謂「北方少数民族」の間でロシア革命とその後の民族政策が如何に受け止められたかが，民族誌的な記述を鏤めて描写されている。元々の研究趣旨が，スウェーデンのサーミ（ラップ）人の事例を他の事例と比較することにあったこともあり（Kuoljok 1985：ix, 1），ソ連研究の下敷きが薄く，それゆえソ連の資料を鵜呑みにしている嫌いがない訳ではないが，マルクス＝レーニン主義とソビエト民族学が，ソビエト体制に照応する形で民族に関する概念を如何に作り上げていったのかについて，知るところが少なくない良書であるのは間違いにない。特にクオリョークの作品が重要なものであり続けているのは，マルクス＝レーニン主義に関するソ連の「教科書」的著作（クオリョークはソ連の学者から唯物論的弁証法の本を紹介してもらっている）を読み込んでいる点である。後で引用する様に，こうした内在的な読みは，ソビエト民族学の固有の論理を紐解くに当たって恰好のガイド役になってくれる。

もう１冊は，Ｆ・ハーシュの『諸民族の帝国――民族学的知識とソビエト連邦の形成』（Hirsh 2005）である。これは，クオリョークの著作とほぼ同一の視角に[5]，知識と体制との相関性や親和性を問うＭ・フーコー（本稿の文脈で言えば，民族学的知識と民族としての「自己のテクノロジー」との関連を問う）やＢ・アンダーソン（センサスという国家制度とそこでの民族分類に，国民統合の１つの契機を見出す）の立論を組み入れて，ややマクロにソビエト体制を叙述している。資料を広汎に駆使して，ソビエト民族学者がロシア革命以降，民族学というディシプリンをソビエト体制の中に組み込み，民族名称共和国に基づく連邦制を下から乃至は正面から支え，諸民族に彼女が言うところの「国家主導型進化主義（state-sponsored evolutionism）」を広めていった過程を見事に活写している。とりわけ，ソ連の民族学的知識の２つの特徴として，「学術的であるが，実践的」であり，局所的な知識が中央に集められていく点を挙げるところ，そうした民族学的知識が政策に利用されるだけでなく両者に双方向的な動きが見える点を描き出したところ，また，複合的な同化のプロセス――センサスや博物館で住民を民族に同化し，その民族をソ連社会に同化するという二重の同化，及び，民族学者による住民の民族への同化と民族学のソビエト化という二重のソビエト化――を指摘するところは，新機軸であり，扱う時代が違うとはいえ本稿の基本線に沿っている（Hirsch 2005：14, 143, 146参照）。

だが，クオリョークにしてもハーシュにしても，言及されているソビエト民族学は，固有のディシプリンを背負った理論体系としては登場せず，政策に結局のところ貢献する社会工学的色彩を濃く帯びたものとなっている。２人の記述は無論誤りではないが，より重要なのは，学術的著作や活動には，理論内在的圏域と政策応用的圏域それぞれが

存在する以上（後者だけを取り出して政策との親和性を指摘するので事足れりとするのではなく，否，綺麗に取り出せるものなのかが問われていると言うべきであろう），前者と後者との微妙なズレにセンシティブになる態度であると私は考える[6]。ソビエト民族学の具体的な民族誌的記述をよく読む者ならばすぐさま気付く，西欧人類学的民族誌との違いをも，説明の範囲に受け入れる様な記述の枠組が求められるのである。寧ろ本稿が１つの支柱とするのは，S・ルアマンの議論である（Luehrmann 2005）。そこでは，ソ連の著名な民族学者Iu・セミョーノフの（今では評判の悪い）アジア的生産様式論（特に，「所有の国家至上主義（*politarizm*）」の概念）が持ち得た，硬直した五段階史的発展論への批判力が，フルシチョフ・ブレジネフ期の歴史学を後景として丁寧に析出されており，私が想定する「防御体」での知的攻防の様相が描き出されている（cf. Gellner 1988: ch.2）。

また，ソビエト民族学[7]の理論展開や民族誌記的記述の特徴乃至は問題点については，これまで多くの成果が積み重ねられてきた[8]。ソビエト民族理論についてはT・シャーニン（Shanin 1984）らによる批判的考察があり，ソビエト民族学との全面的格闘としてE・ゲルナーの対話プロジェクト（Gellner 1980）は，貴重なものとなっている[9]。だがこれらに於いても，ソビエト社会学への言及がなく，理論そのものの内在的な微視的検討が不十分といった限界があるのも事実である。西欧とソ連とで学術的言説の編成が異なっていた以上，「民族学」という同じ術語で指示されている議論の対象が異なっている点は，差異を過度に強調する必要はないとはいえ，常に留意すべき事柄である。

1.3 本稿の構成

本稿は，限度を持つとはいえ以上の視角から，ソビエト民族学，特に民族理論の発展過程と重なり合うソビエト民族学の流れについて，その「防御体」での理論的蠢きを記述するものである。便宜的に３名の民族学者を取り上げ，その民族理論の軌跡を追う。

１人は，トナカイ遊牧民であるシベリア・北方トゥングース（エヴェンキ）人について精緻な調査を行い，膨大な研究業績を残したセルゲイ・ミハイロヴィチ・シロコゴロフ（Sergei Mikhailovich Shirokogoroff, 1889–1939）である。彼がここで取り上げられるのは，世界に先駆けて「民族（*etnos*）」概念を，単なる記述概念としてではなく分析概念として練り上げたその功績ゆえであり，そのエトノス論とソビエト期のエトノス論との対比によりそれぞれの立論の特徴が際立つからである。

次に，ソビエト期のエトノス論の立役者であり，長らく民族学研究所所長として大きな影響力を行使したユリアン・ヴラジミロヴィチ・ブロムレイ（Iurian Vladimirovich Bromley, 1921–1990）である。ここで，彼の生涯について簡単に記しておきたい。刊行が遅すぎたとでも言うべきブロムレイへの追悼論集，S・Ia・コーズロフ編集の『アカデミー会員ブロムレイとロシア民族学――1960～1990年』にある短い伝記によると

（Kozlov 2003：3-4），ブロムレイは，1921年２月，モスクワに生まれた。父は古代ギリシア・ローマ史の著名な研究者であるＶ・Ｓ・セルゲーエフで，セルゲーエフの父親は，同論集に寄せたティシュコフの小論によると（Tishkov 2003：5），後代に計り知れない影響をもたらした演出家のＫ・Ｓ・スタニスラフスキイであった。初めモスクワ大学物理学部に進学するが，第２次世界大戦に参加，ベルリンで終戦を迎えた。その後モスクワに戻るが，歴史学部で学ぶことになり，南スラブ史を専門とする。特に，15, 16世紀のクロアチア農村部に於ける社会関係をテーマとして勉学を続け，1956年に准博士号を取得した。ティシュコフ同様，歴史学が本来の専門であった点は興味深いが，1965年に，前年に出版した『クロアチアに於ける封建制の形成――スラブ諸族に於ける階級形成の過程の研究に寄せて』で博士号を取る。こうしたブロムレイが，重病ゆえ職務を続けられなくなったＳ・Ｐ・トルストフ（専門は中央アジアの考古学と民族学）から民族学研究所所長の地位を引き継ぐことになったのは翌年の1966年のことである。それから1989年まで所長職を続け，1990年６月に亡くなった。この所長職の間，練り上げられていったエトノス理論が本稿での議論の大きな対象である。

３人目は，既にその名に触れた，ヴァレリイ・アレクサンドロヴィチ・ティシュコフ（Valery Aleksandrovich Tishkov, 1941-）である。1941年，スヴェルドロフスク州に生まれ，1964年，モスクワ大学歴史学部を卒業後，1969年に「カナダ1837年革命の歴史的前提」で准博士号を，その10年後，「植民地カナダに於ける解放運動」で博士号を取得した。一時期，科学アカデミー歴史部門で研究助手を務め，1989年から，ブロムレイの後を受けて，民族学研究所の所長となり，現在に至っている。ティシュコフは，エリツィン政権の時に民族問題担当大臣を務めたこともあって，民族や移民，人口に関する政治的発言が多い人物としても知られる。本稿で彼を取り上げるのは，寧ろ，彼の議論が西欧人類学にとってアクセスし易い種類のものであり[10)]，それゆえ彼のソビエト民族学批判の意義と限界を明らかにし易いからである。また，彼が所長になって以降，民族学研究所は，民族問題への積極的な取り組みを行い，現在のロシア民族学のパラダイムを主導しているという側面も無視できない[11)]。

本稿は，時系列を無視して，ティシュコフ，シロコゴロフ，ブロムレイの順で記述を進める。そうするのは，ティシュコフの議論が，西欧の人類学や社会学の見解を梃子にしてソ連時代批判がなされている点で，西欧人類学とソビエト民族学との距離を先に明らかにし易いからである。この距離感を予め得ておくことは，ソビエト連邦に於ける民族の在り方を把握する上で良い予習になる。その後でシロコゴロフからブロムレイへ跡付けるのは，ブロムレイが「エトノス」という術語を引き継いで，ソビエト民族学の「防御体」にそれをワクチンであるかの様に注入する有様を吟味しやすいからである。逆に言えば，シロコゴロフには，ソ連体制による「固い核」は存在しておらず[12)]，両者の問題設定は当然大きく異なっている。

最後の節では，本稿の様な考察が，単に学説史の整理をして理論展開を追う作業にとどまらず，研究史のサーヴェイとは一味違う，保守本流の人類学的議論であることを示そうと思う。

2 ティシュコフによるソビエト民族学及び民族理論批判

民族学研究所の所長になった途端，と言うべきか，ティシュコフは，ソビエト民族理論への批判を電光石火の如く始める。それは世界によくある，前任者を叩いて文壇のスターダムにのし上がる戦略や，ペレストロイカの知的雰囲気の為だけではなかった。西欧での議論でもって理論武装し，批判を進めた背景には，彼なりの国民論が通底していたのであり，それゆえ，ソ連批判は全面的なものと映った。だが，実際に，何が批判されたのかを内在的に問う必要がある。

2.1 批判の矛先

ペレストロイカ期，民族ナショナリズムがソ連内で勃興した原因の１つを，ティシュコフはソビエト民族学史に求めた。彼に依れば，内に抱えた民族問題をソ連の民族学者が有効に認識できなかったのも，ソ連の旧来の民族理論がマルクス＝レーニン主義を注釈することでしかなく，「壮大な似非学問的行為」（Tishkov 1989c：5）に過ぎなかったからに他ならない。結果として彼らは「理論的袋小路」（Tishkov 1989b：50）に追い込まれた。ソ連の民族（学）理論とは具体的には，ソ連流の唯物論の直線的な発展段階説と，民族への原初的特性重視論（primordialist approach）の偏重を指す（Tishkov 1994：444）。これにはさらに，学術のみならず政治・行政的次元が入り込み，連邦制機構や民族政策，民族帰属を重視する社会的諸制度，民族主義的言説も絡んでくる。

国内に偏在する諸民族を類型化するアプローチがソビエト民族学の伝統であった。マルクス主義概念である「社会経済的構成体」を媒介にして作られた「エトノス社会的有機体（*etno-sotsial'nyi organizm*，ESO）」概念（後述）が理論体系の枢軸に置かれ，諸民族を「種族（*plemia*）」，「準民族（*natsional'nost'* 或いは *narodnost'*）」，「民族（*natsiia* 或いは *narod*）」の何れかに分類することが人類学の主要課題とされた。この課題は，諸民族を直線的な発展段階の過程に位置付ける作業とほぼ同じで，諸民族をハイアラーキーな秩序体系に組み込む行政的営みも意味していた。諸民族の類型論は民族自治地域の画定という政策に直結し，「民族」の段階にあるものは民族名称共和国の主幹民族になれると政策を理論面から補強した，とティシュコフは見る（Tishkov 1994：444; cf. Skalník 1990）。

以上の様な類型論を支えていたのは，民族に対する「実体論的」，「原初的特性重視」アプローチである。言うまでもなくソ連において，「民族とは，言語・地域・経済生活・

文化の共通性に表れる心理状態の共通性をもとにした，歴史的に構成された人々の強固な共同体」（スターリン）であった。「強固な共同体」である民族の「共通性」を抽出することで，民族を実体化し，諸民族を類型化していったのである。民族は，「経済生活」というソ連流唯物論の中で絶対化される，不変の実体的核をもった集団とされた訳であるから，ソビエト民族学者の中で，さらには民族主義的言説の担い手の中でも，民族の原初的特性を偏重する態度が揺るぎないものになっていったのは自然の道理であった。こうした実体論的・原初論的把握は，ソ連の指導者が「民族の接近と融合」や「ソビエト人の創造」を謳ったにせよ，民族学者が「民族△△的過程」[13] の概念で民族間結婚やバイリンガリズムを重視したにせよ，矛盾とは考えられず，持続していた訳である。

民族に対する実体論的態度は政策に如実に反映された。ティシュコフはそうした政策の代表例として，国勢調査と国内パスポート制度を批判する（Tishkov 1989a：80–81；1989b：53–54）。こうした社会的諸制度で住民は，たとえ民族間結婚による子供でも，また複数の民族に帰属意識を持つ者でも，1つの民族名を名乗ることが強制され，出自の民族が固定化され，記録される。これは個人の権利の侵犯になるのではないか。何故この様な強制が必要なのか。民族帰属を1つに絞れなければ，なぜ単純に「ソビエト人」と答えてはいけないのか。多民族国家ユーゴスラヴィアでは「ユーゴスラヴィア人」という範疇があるではないか，と[14]。この辺りのティシュコフの論の運びは，民族やエスニシティをめぐる西欧での構築主義的議論の席巻の中にいる読者にとって，確かに深い説得力を持っている。

以上から明らかな様に，ティシュコフの批判の矛先は，ソビエト民族学，特にその民族論と，ソビエト民族政策との2方面である。だが，これまた同様にすぐに見てとれる様に，彼の批判の重心は後者に置かれており，民族学やその民族理論の内部に深く分け入っての批判ではない。ここにティシュコフの批判の限界があるだけでなく，理論放棄の態度すら見えてくる。だが，彼のソ連民族政策の批判は，当然のことながら，民族名称共和国を単位にした連邦制への眼差しと絡み，また，ほぼ同型の政治構造を引き継いだロシア連邦にも当てはまるものとなる。であるからこそ，彼の発言はその重職も手伝って政治色を帯びたのであるが，それは，晩年のブロムレイに，「そんなことではカオスそのものだ」と「殆どパニックに陥った叱責の感じで」（Tishkov 1997a：139）言わしめた程であった。

2.2 民族から国民へ

ティシュコフの主張は，政治思想としては新しいものではなく，ネイション（nation, *natsiia*）を，市民・国民のレベルで想定し，そこに民族の要素を入れない，という内容であり，一種のジャコバン主義となっている。曰く，ソ連は地域原理による行政体系（カナダやオーストラリア，アメリカ合州国などの連邦制が念頭に置かれている）を採っ

てはおらず，民族を単位にして構成されている国家である。民族単位の連邦制国家はレーニンの発想であったが，当時は革命の正当化と合意形成の為に必要なものであったにせよ，現在では留保なしには有効と見なし得ない考え方である。「今日，民族自決の原理は，国家政策の貯蔵庫から事実上いたる所で消えている」（Tishkov 1989c： 9 ）。民族別連邦制は経済効率から言っても有効ではない。実体としての民族を単位としたハイアラーキーな連邦制を彼は疑っているのである。

ティシュコフがここで念頭に置いているのは，昨今の旧ソ連の民族紛争が鋭く生じたのも，ソ連体制が民族なるものを抑圧したからというよりは，ソ連体制そのものが民族なる基準を絶対視して民族ハイアラーキーを制度でも価値観に於いても作り上げて来たからだ，とする見方である[15)]。彼はこう述べている。

> エスノ・ナショナリズムは， 社会主義的連邦制が構築される基盤となった・・・民族間の争いや紛争（ソビエト連邦の解体は言うまでもなく）は，共産主義の社会的実験の失敗のみならず，ソビエト的「社会主義的民族」を共和国の形で発展させる際に得られた「進歩」によっても，生じているのである（Tishkov 1994：447, 450)。

上述した民族理論に則った民族別共和国の形成は，各共和国に地方エリートと民族的特権階級を生んだ。彼らは排外主義的標識を提示し，メディアを通して自民族に対する排他的な忠誠を求めて来たし，現在のポスト・ペレストロイカの状況では益々それが強まっている。民族主義，メディア，アカデミムの言説は今や殆ど見分けが付かない程で，ソ連及びロシアの民族学者は，原初的特性重視論でこうした動向に応えているのである，とティシュコフは断じる（Tishkov 1994：448-449）[16)]。

斯くして，ティシュコフは国民論を主張する。民族的ハイアラーキーな諸体系の廃絶と地方分権化を説いた後，グローバライゼーションの影響により国家は一種の制御器に過ぎないものになりつつあり，国家内で如何に民主化や社会環境の改良を行うかという課題が国家に課せられている（Tishkov 1989c：13)， と現状判断を行う。 曰く， 柔軟でありながら同時に１つの主権をもった国家が必要である。 しかしながら，「連邦制の主体として『民族国家』を選択すると，一連の理由により，ソ連国家全体の主権の概念が狭いものになる」（Tishkov 1989b：59)。ソ連全体という国家主権が憲法上の権利として強化されなければならないのであり，これは社会生活の民主化の過程と平行になされる必要がある。その為には「民族的諸権利の主体は先ず何よりも最高の社会的価値としての市民［＝国民］[17)]」にあるべきで， 次に民族， その次に共和国の形を取る国家制度（*gosdarstvennost'*）にあるべきである」（Tishkov 1989c：11）と論じる。 この辺りのことは， エリツィンが1990年５月， ロシア共和国最高会議議長に選出され， ロシアの主権宣言を行なったとき，ティシュコフは新しい国名として，「ロシア連邦ではなく，ロシア」とすべし， と主張した処に良く表われている（Lapidus 2004：134-135, 172,

n.25)。

議論のこの順序，即ち，先ず市民＝国民，そして民族，その次に民族共和国民という段階付けは，理解するのに少し時間がかかる。ティシュコフは，民族を全て消去して国民に解消しようとする多くのロシア民族主義派の政治家とは，同じ立ち位置にいるのではない。では，市民＝国民の次の論理的階梯に置かれた民族はどういう存在になり得るのか。彼に依れば，民族には次の様な６つの権利があり，あるべきだと言う（Tishkov 1989a：79；1989b：53)。

(1) 存在する権利

(2) 自分でアイデンティファイする権利

(3) 主権・自決・自治の権利

(4) 文化的独自性を保存する権利

(5) 居住する地域の天然資源を管理する権利

(6) 世界的文明の達成とその利用にアクセスする権利

(1) と (4) については特に説明を要しないだろう。(2) は上で述べた様に，国家による１人＝１民族というソ連的図式の強制をなくし，民族名を自由に自己主張する権利を（主張しないという権利を含めて）認めるべきだということである。「対面的共同社会」が第３者によって名付けられることで「全体社会」の下位の存在形態として民族が成立する側面を指摘した内堀基光（1988）の民族論を想起して言えば，第３者としての国家権力による名乗りの強制の意義をティシュコフは強く懐疑している訳である。(3) は誤解を招く表現であるが，いわゆる民族自決の論理が復唱されているのではない。(5) とともに (3) の提案は，環境破壊による生活環境が問題になっているシベリア北方の先住民族の意志決定過程への参加が議論されている。(6) は，ソ連流唯物論の偏重と諸民族のハイアラーキー化によりいわゆる精神的側面が忘却され，偏見が生み出された現象を鑑み，シベリア北方先住民族への無視を告発し，彼ら・彼女ら自身が陥っているアパシー状態からの脱却を示唆しようとするものである[18)]。

ティシュコフは，民族をめぐる以上の原則を，広い国家的視野の元で次の様に表現し直してもいる（Tishkov 1991：627)。

(a) 市民権と自由の拡大。民族アイデンティティの選択の自由を含む。

(b) 民族的・文化的自主性の領域に於ける諸権利，結社の自由などの拡大。

(c) 連邦構造の改革。民族名称国家間にあるハイアラーキーをなくす。

(d) 北方とシベリアの少数民族に固有の利害関心を確かなものとする処置をとる。

(e) 国内追放された民族に居住地の選択の自由を認める。

これらの原則は，原則 (a) は権利 (2) に，原則 (b) は権利 (2)，(3)，(4) に，原則 (d) は権利 (5) にと言った様にほぼ，上記の民族の権利に対応している。問題となるのは，原則 (c) である。この点，ティシュコフは明示的に語ることが少ないが，

民族共和国を単位とするソ連的，ロシア的連邦制の今後を念頭に置いて，彼が次の様に述べる箇所を読めば，ある程度，具体的なイメージを伴って彼が言わんとすることが推測できる。

> 私の立場はこうである。共和国に於いては，そこに居住する民族集団の１つ，乃至は２つ以上の好ましい，模範的な文化システムが，国家全体のレベルで優勢な文化システムと共に――この場合には，ロシアの（*russkii*）文化システム，正確にはロシア市民の（*rossiiskii*）ロシア語話者の文化システムと共に――，その国家諸制度で定着し，反映され得るし，されなければならない（Tishkov 1997a：165）。

凡そ，ティシュコフの民族／国民＝市民論はこの引用文に帰着すると言って良い。続けて述べられる次の箇所は，政治的含意もあって，さらに理解し易いものとなっていよう。

> 言い換えれば，統治や文化に参加するに当たって必要なのは，共和国住民の民族帰属という原理ではなく，（定住資格を最大限にして）その地域の文化に参加する原理に依って立つことである。つまり，タタールスタンの大統領には，民族としてのタタール人のみならず，ロシア人やチュヴァシ人でも選出され得るということだが，このとき，その人物は，タタール語を話すことができ，然るべき数の選挙民の信頼を当然，得ていなければならない（Tishkov 1997a：165）。

要するにティシュコフは，マルクス＝レーニン主義を批判しながら，極めて両義的な方向を模索しているのである。一方で諸民族（とりわけ北方諸民族）の権利を擁護し，他方で民族という帰属意識を相対化して，国民の形成，つまり，国民かつ市民としてその政治社会的存在を規定されるところの個人を単位とした国民統合を志向している訳である。彼の論理の構造は，国民としての統合が先ず始めに先行し，その次の段階として民族帰属を土台に据えた主義主張の許容が来る形になっている。主幹民族の自決ではなく，共和国に居住する全ての住民と民族の自決を公に主張した，当時のリトアニアのランズベルギス大統領やカザフスタンのナザルバエフ大統領を彼が評価したのも（Tishkov 1992：57），まさにこうした論理に依っていよう。

2.3 民族学の民族問題研究への転換

ここで旧西側での旧ソ連論を１つ取り上げ，ティシュコフの国民＝市民／民族論と対比させてみたい。それは Tishkov（1991）へのコメンタリーとしても書かれた，アフリカ研究の文化人類学者 J・コマロフの論考（Comaroff 1991）である。コマロフの論評は数点に及んでいるが，本稿の枠内で重要なのは，ティシュコフがソビエト・イデオロギーを注意深く避けようとしながら一方で陥っているイデオロギー的バイアスが指摘されている点である。第１に，「西側の学界では，今日，社会階級の問題を抜きにして

文化的差異を論じるのは殆ど不可能である。ティシュコフはこの論点を単純に無視している」(Comaroff 1991: 679)。第2に，ティシュコフの議論は保守的な中央主権主義と地方分権主義の両極の中に落ち込んでおり，どちらかというと前者に傾いている。第3に，彼の構想する新しい形の連邦制については具体的には殆ど述べられていない。超民族的連合と下位民族集団のアイデンティティをどう両立させるか，がヤヌスの如き問題なのである。市場経済と民主主義の元でこれが達成されると考えているのであろうが(だがこれは，私見では，ティシュコフのみならず他のロシアの昨今の学者に見られる傾向である)，こうした条件を備えていると考えられている西欧に於いても民族の共存は達成されていない。ティシュコフの文中に垣間見える「西欧とのイデオロギー上のロマンス関係」には，リアリティを見失ってしまいかねない危険性がある，と言う(Comaroff 1991: 682-683)。

私はコマロフの論評に賛成である。第1の論点は，その通りであるし，第3の論点は既に前項で見た如くである。強いて批評すれば，第2の点に関しては，多少ティシュコフに公平に，そう保守的・中央集権的ではないと言える。例えば上で見た引用での彼の提案は，昨今のロシアではなかなか認められにくく，彼自身書き添えている様に，「タタールスタン憲法では認められているが，ロシア連邦憲法では，市民的平等の侵害として解釈される可能性がある」(Tishkov 1997a: 165)と指摘しつつも，ロシア連邦レベルで彼は(上の例を引き継いで言えば)タタールスタン寄りの立場を表明しているからである[19]。ティシュコフがその立論に於いて譲ろうとしないのは，ロシアをスペインや中国，インドネシアといった国々の多民族国家と同列には捉えない立場であり，「国民としてのロシア市民人(*rossiiskii narod-natsiia*)」の存在(民族的多様性がありながらも現に統一性を保っているが，1つの民族という自己表象を持たない人間集合の存在)を既に所与の事実として，「既に出来上がった事実」として認める立場であり，それゆえ恰もバラバラな諸民族が群雄割拠しているかの如き状態としてロシアを捉える論者を強く批判するのである(Tishkov 2005: 367-368)。

コマロフの疑念は分析上，頷けるものであるし，ティシュコフの議論の土台が西欧のエスニシティ・ナショナリティ論を多く援用している点で多くの西欧側の研究者にとってアクセスしやすい状況からすれば，深く受け止める必要がある。しかし注目すべきは，ティシュコフに於いて，民族学が民族問題研究へと枠組が変化し，ロシア民族学の比重の中心が政治的現象面へ傾斜していった点であろう。学的枠組のこの転換は，外圧(民族紛争の激化)やソビエト連邦の解体によるエトノス理論の瓦解と映るかも知れない。だがティシュコフは，民族・エトノス概念を内在的に吟味することはせず，それゆえ民族が問題になっている状況を所与の前提とし，現状への理論的介入を放棄したと言って良い。要するに，ティシュコフは，民族理論家としてではなく民族・国民に関する政治思想家として振る舞い続けているのであって[20]，国民＝市民論でもって前提的価値判断

を民族学や理論の外部から発しているのに過ぎない以上，ソビエト・エトノス理論の「防御体」は攻撃を，実は，受けていないことになるのである。

3 シロコゴロフのエトノス論

3.1 民族学の基礎問題としてのエトノス概念

シロコゴロフは，20世紀初頭に大きく勃興しつつあった人類学への危機意識を強く持っていた。世界各地で民族誌的データが集められ，歴史理論への接近も図られていたが，何ら統合的な見解を生み出しておらず，確固たる精緻なモデルや概念を作ろうとしてはいない。こうした状況は彼にどう映ったか。「袋小路という人もいるがそうではない。これは真の危機である・・・もし民族誌学がその理論の後方を要塞とし，自らを組み立て直さないのであれば，事実の重みで窒息するだろう」（Shirokogoroff 1935：ix）。この民族誌学の現状を，彼は，当時「社会」概念が氾濫していたアメリカ社会学とパラレルなものと見ながら，「民族誌学が必要とするのは理論，つまり民族学である」（Shirokogoroff 1935：x）と主張し，隣接諸科学とのリンケージを図りつつ，民族学の理論的確立を孤立無援のまま目指したのであった。その壮大な理論図式となって結実したのがエトノス理論である。

シロコゴロフにとって，民族誌学（*etnolografiia*; ethnography）とは，「人間を彼のエトノス集団に於いて，彼の内面的特質の側面から研究する。つまり，物質的財産の生産者，社会の創設者，世界を認識し理解する能力の創造者として，人間を研究する」（Shirokogoroff 1923：32）ものであり，民族学（*etnologiia*; ethnology）は，「人類学・民族誌学・言語学によって研究される人間の様々な諸側面の関係を明らかにし，個々の『エトノス』の生活が従う諸規則を究明すること」（Shirokogoroff 1923：33）である。一言で云えば，彼の目には，当時の民族誌学はデータだけは十分に蓄積していたが，そのデータに表れる現象の背後を言語化することに怠惰しており，将に「危機的」状態と映った。「民族誌学」は発展して来ているが，「民族学」は未だ成立していないという学的判断のもと，現象面のみならず，それを突き動かしている規則性の解明，エトノスの生成と消滅のメカニズムの理論化を「民族学」に課すことで，危機を打開しようとしたのであり，この意味で，エトノス理論は，「民族学」の学的存在基盤となるものとして構想されたのである。

3.2 エトノスの定義

シロコゴロフのエトノス論は，研究生活の後半期をその理論化に捧げた経緯からも想像つく様に，極めて壮大な計画の基に展開されており，当時の熱力学や数学の知見が援用されるため数式が羅列し，かなり読みにくいものとなっている。ここでは，その定義

と民族学の枠付けを見てみたい。彼は民族＝エトノスを次の様に定義している。

> 人類が種として文化的並びに身体的に変化する過程が進行する場の単位こそ，「エトノス」である。これは，その「エトノス」自身によって，出自・慣習・言語・生活様式の同一性で統合された人間集団として意識されている（Shirokogoroff 1923：122）。

エトノスのこの定義から窺えるのは，過程が重視されていること，慣習にせよ言語にせよ，ある文化的属性の同一性や共同性が前提とされていること，その同一性による集団統合が当の集団自身に意識されていること，の３つの視角である。

集団の自己意識という論点は，当時としては斬新であった。シロコゴロフが自己意識に注目し得た背景には，恐らく，民族間接触が激しく —— 例えばブリヤート人のエヴェンキ化，エヴェンキ人のブリヤート化（渡邊 1995：146 n.10参照）など ——，実体的・制度的「氏族」と意識上の「氏族」とのズレ（Watanabe 2003）が見られた帝政期シベリアでの緻密なフィールドワークがあっただろう[21)]。そして次節での記述を先取りして言えば，ブロムレイにとって枢要な論点もまた，力点の置き方は異なるとは言え，集団の自己意識であったのである。

同時にシロコゴロフは，やや別のニュアンスを強く出している。民族学的対象をどういう単位に絞るべきかを考察するにあたって，彼は「住民」，「社会集団」，「宗教集団」など集団の単位に関する様々な概念を比較してから，次の様に論じ，科学的道具としてのエトノス概念の有効性を主張する。前後の文脈なしには分かりにくいが，彼のエトノス論の骨格を端的に示しているので，少々長く引用したい。

> 上記の単位は全て，類似の過程に由来する・・・即ち，同じ言語を話し，共通の起源を信じ，集団意識を持ち，内婚を実践する，多少とも類似した文化複合に由来する。これは，エトノス単位（ethnical unit）に関する我々の定義と合致する定義である。だが，それらの単位全てが「エトノス単位」である訳ではない。事実，その様な結晶化作用は如何なる集団でも起こり得ることを我々は見てきた。何故なら集団というのは，環境，経済活動，心理複合，特にエトノス間環境の特定の状況の結果だからである。とは言え，結晶化した状態は，常に観察できる訳でもなく，場合によってはそんな状態が殆ど生じないこともある。例えば，社会的にも経済的にも差異を孕んでいる状態にある集団の場合がそうである。これこそ，エトノス単位を形成することもある過程であり，この過程こそ私がエトノスと呼んでいるものなのである（Shirokogoroff 1935：14，強調は原典）。

類似した文化複合，同一の言語，共通の出自，集団意識の共有，内婚の実行といった特徴を兼ね備えるのは，「エトノス単位」に他ならないと彼は前半部で論じている。議論すべきなのは，これに続く展開である。即ち，実際には集団全てがエトノス単位にはならない，というのも，その内部で様々な形の差異化が認められる場合もあるからであ

る。エトノスとは，エトノス単位とはならない集団の変化過程をも含む，エトノス単位が生じる過程のことである，と彼は主張している。先に見た定義でエトノスは，具体的な個々の人間集団を指していたが，ここでは，そうしたエトノス単位を生じさせたり変化させたりする過程もエトノスとして表現されている。

さらに北方トゥングース人の民族誌の中で，シロコゴロフはエトノス単位を，「民族誌的諸要素の変化過程，及び続く世代と生物学的過程へ伝達が営まれる単位」と定義し，「こうした単位は常に変化している。それゆえ，昨日の単位は明日の単位と全く同じではない。しかし発生的には同一である」と述べている（シロコゴロフ1945：10）[22]。ここで明らかなのは，エトノスは常に過程と変化を問う概念であって，仮にあるエトノス集団が持続的な文化的特徴を持っていてもそれはその集団を取り巻く諸環境による一時的様相に過ぎない，という議論である。ここに至り，民族学の役目として，エトノスの変化の「発生」論的メカニズムを同定する理論的作業が定位されたのであった。

3.3 過程・環境・適応

抽象化されてモデルとなる社会的過程であり，同時に，経験論的に観察可能な民族集団でもあるエトノスの発現要因として，シロコゴロフが注目するのは環境への適応である。エトノスという現象には，3つのレベルの環境があると彼は論じている。1つは，気候や動植物相といった自然環境である。2つ目は，第1環境の自然に人間が働きかけて作り上げた，言い換えれば「自然の新しい機能を主体的に創り上げた」環境である。これを古典的な言い回しで文化的環境といっても差し支えないだろう。この第2環境とエトノスとの関係が複雑になる時こそ，「社会構成（social organization）」が生まれる契機である。そしてエトノスの第3の環境とは，「エトノス環境」，つまりエトノス間関係，他の諸々のエトノスとの関係である。以上3つの環境との相互作用の中で過程として生じるエトノスを，シロコゴロフは最終的に，環境要因を変数としたエネルギー論として考察しようとしていた。

シロコゴロフのエトノス論で特徴的なのは，適応をエトノス単位の形成に於ける最大の動因とみなし，適応すべき環境のなかにエトノス間関係を含めた点にある。以下，詳しく見ていこう（Shirokogoroff 1935：14）。

有機体にせよエトノス単位にせよ，集団は環境に適応しなければ生存が脅かされる。ある所与の環境に適応するということは，言語や「心意複合（psychomental complex）」などの類似性に基づいて集団がエトノス単位として「結晶化（crystallization）」する，ということである。言い換えれば，当のエトノス単位が単位であるのも，それが統合へと向かう「求心運動（centripetal movement）」を抱えているからである。だが，エトノス単位が求心力のみを保持している状態は，第1次（自然）環境が変わらぬものではない以上持続しないものであり，新しい環境へ再適応する力に欠けている状態でもある。

常に，刻々と変動する環境に対して機敏に適応・再適応するにあたっては，エトノス単位は「遠心運動（centrifugal movement）」をも内部に保持していなければならない。つまり，求心力（a）と遠心力（b）の関係を示すに当たっては，

$$\sum_{1}^{n} a = \sum_{1}^{m} b$$

という等式が望ましく，等号が成り立たない場合，エトノス単位は適応力に欠けるか，分解していって別の単位に包摂されることになる。上の数式が単純に a = b という形にならないのは，求心力にせよ遠心力にせよ，１つのエトノスのことが問題になっているのではなく，様々なエトノスが近接して互いに関係し合っている状況（エトノス間関係）が問題になっているからであり，そうした諸々のエトノスの総体（和，Σ）が考察されているからである。

では，１つのエトノスの内部ではどういうことになっているのか。当の単位が有する人口数（q），適応力（S），占有領域（T）の関係を考慮すれば，エトノス単位の統合が持続するには，エトノス内部の「均衡状態（equilibrium）」が

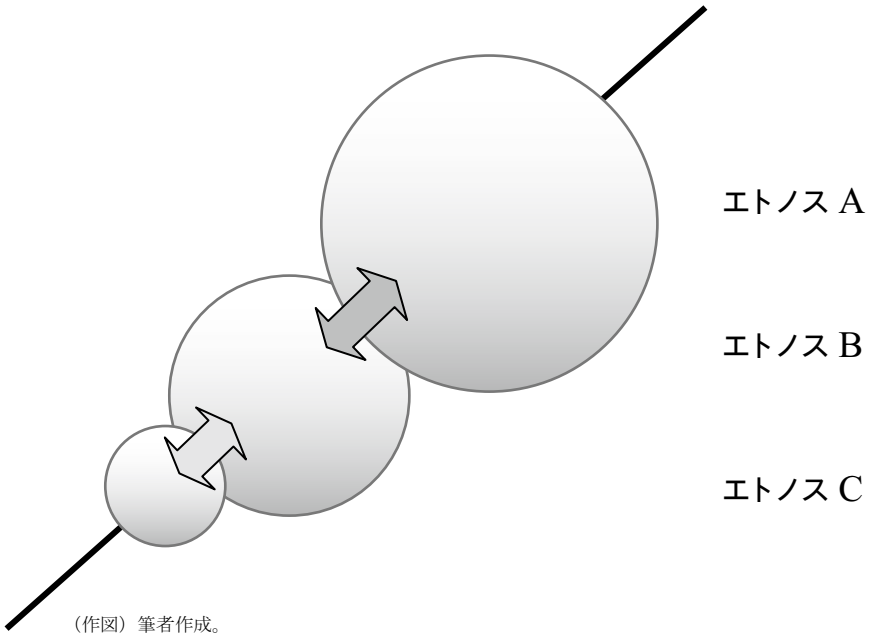
$$\frac{q}{ST} = \omega$$

として不変である必要がある[23)]。即ち，一定の人口が適度な適応力と占有領域の適切な広さを有しているとき，自らをエトノスとして維持できる，といことである。

だが以上のエトノスの均衡状態というのは一種の理念型であって，実際にはこうした均衡状態はなかなか保証されない。とりわけ広大な領域を移動するトナカイ遊牧民のトゥングース人にとってこのことが意味するところは大きい。その背景には大きく言って２つの原因がある。１つは，適応するに当たって当のエトノス単位は心理複合を変更しなければならないが[24)]，余りに環境の変化の「テンポ」が早い場合，その速度に追いつけない。エトノス単位が自らを変化（再適応）させる時の「潜在的限界」を，環境変化のテンポが上回っている場合，均衡状態は崩壊し，さらには「その単位の完全な解体も生じうる」。もう１つの原因は既に触れた，エトノス間関係の不均衡である。エトノスは他のエトノスとの関係の中で「結晶化」するのであって，それゆえエトノス単位の解体は，エトノス間関係という環境に於いてのみ生じることになる[25)]。上記の観点からすれば，民族（nation）―― より大きな力をもった大エトノス単位 ―― とは，エトノス間関係の均衡状態が織りなす副産物に過ぎない。

以上のことを私なりの言葉で言い換えると以下の様になる。ある所与の時点で，ある領土に３つのエトノス（乃至はエトノス単位）が共在しているとしよう。エトノス A は，人口，占有している領土，高度な政治権力，統合力を有する宗教などなどの点でエトノ

スＢよりも大きく，エトノスＢは同様にエトノスＣよりも大きい（図では円及びその大きさで示す）。そしてこの３者は，互いに孤立して存在しているのではなく，緊密な接触の状態にある[26]（図では，円それぞれが接する処での矢印で示す）。またこの接触の状態は，エトノス自身の大きさやエトノスが置かれているマクロな環境に於いて，一種のハイアラーキーを形作ってもいる（図では，謂わば，団子３つを貫く串の線で示す）。矢印の処で常に生じているのは，シロコゴロフが言う「遠心力」と「求心力」との衝突であり，一方のエトノスから他方へのエトノスへの様々な文化社会的圧力である。多くの場合，大きな単位の方の圧力が大きく（エトノスＡ＞エトノスＢ＞エトノスＣ），小さな単位の方が小さい。とはいえ，大きい方が小さい方を飲み込むという単純な話では全くない。小さな単位は，圧力が掛かったとき，求心力でもって反発する。例えば，エトノスＡが電波の強い宗教をエトノスＢにもたらすとき，エトノスＢはそれをそのまま受容するのではなく，一部を取り入れ一部を捨象するなどして取り込み，元々のエトノスＢに適している宗教的実践の形態を生み出し，それでもってエトノスＢの統合を保とうとする。シンクレティズムなどはまさにこうしたことの好例である。こうしてエトノスＢは自身の「心意複合」を維持していくことになる。従ってエトノス間関係は，常に動態を示すのであり，一種の押しくら饅頭の様相を呈し続けるのである。



（作図）筆者作成。

【図１】 シロコゴロフのエトノス理論に於けるエトノス間関係

3.4 エトノスの環境と制度

常に変動する環境への適応過程という側面を強く打ち出すシロコゴロフのエトノス理論は，エトノス形成と解体の進行が過程の中の一断面に過ぎないこと，エトノス単位が「結晶化」することはあってもそれは実体的存在ではなくあくまで一時的な均衡状態に過ぎないこと，また，環境には他の集団的行為主体をも含むものであることを教えている。それゆえ，環境は決して安定することがなく，行為者が環境として措定する対象は常に変異するのである。

シロコゴロフのエトノス理論の意義を正確に推し量るのは困難であるが[27]，殆ど同じ問題意識を有して類似の議論を提出したW・ミュールマンの論考を敷衍してみたい。1950年代の現在，データは広く収集されたが，「学問的には」，フィールドワークや経験的議論を「いったん停止して理論的・批判的に反省することを論理的に要請する新しい状況」が引き起こされた以上，「地域的民族誌学は，理論的民族学による統合を必要としている」，とミュールマンは状況を確認する（ミュールマン 1982：75，強調は原典）。この現状確認は，30年前のシロコゴロフのそれと全く同じであり，シロコゴロフを高く評価し，引用しつつ彼が繰り出した主張，「民族学者の対象はエトノス[28]間の諸関係と諸関連であり，それら諸関係においてみえてくる規則性と類型的行動経過である。民族学者にとって個々のエトノスは閉鎖的体系ではなく開放的体系なのである」（ミュールマン 1982：80）という点と，「エトノス間の相互関係を，異なる等級に分化している一つの動的均衡体系として把握する考え方」（ミュールマン 1982：82）には新味はない。シロコゴロフと違う手つきを見せるのは，ミュールマンが民族誌学の対象としてエトノスを措定し，「民族」（Völker）と弁別する処である。彼は，「『民族』は概念として，本質的に西洋史の，そして西洋史だけの成果」と見なし，エトノスと民族とを分けて捉えている（ミュールマン 1982：77）。「未開民族」（つまり民族誌学の対象としてのエトノス）は，人口規模も小さく，空間的に均質ではない形で居住し，社会関係として血縁を重視しており，これこそが民族誌学の対象とされる，というミュールマンの議論は，ロシア人もブリヤート人もエヴェンキ人も概念上は同じエトノスと見なしたシロコゴロフのそれとは大きくかけ離れている。

となると，ここで生じてくる問いは，エトノス理論一般にとって，民族（さらには国民）とエトノスとの概念的関係を如何に考えるべきなのか，というものに違いない。これは，別の言い方では，エトノスの環境の制度的側面をどう見積もるか，という問いである。シロコゴロフの理論の大きな特徴は，既述の如く，エトノス維持の過程とメカニズムをめぐる動態的把握にあった訳だが，エトノスの環境は際限なしに動態である筈がなく，歴史的経緯で凝集化した様々な制度（特に政治制度）でもって成り立っている。シロコゴロフは，そうした制度の最たる部分である帝政ロシアのシベリア行政機構とその先住民族への影響に対して目を覆った訳では決してなかったが，マクロな，そう簡単

には変化しない政治制度としての環境を十分に理論枠組に組み入れなかった。一言で云えば，行政に代表される近代的政治制度が遍く浸透した20世紀以降の世界に於いて，たとえどんな辺鄙な場所を調査のフィールドとしようとも，シロコゴロフの余りに動態的な構図は留保なしに適用できないのである。従って，シロコゴロフのエトノス理論と，次節で見るソビエトの，特にブロムレイのエトノス理論との間に，共通点と同時に激しい相違点を見極めなければならない。ソ連の場合，他の近代諸国とは比較しにくいほど，民族をめぐる制度設計と維持に行政的にも理論的にも苦心し，正に民族を制度化しなければならない政体であった以上，エトノス理論の構造が極めて錯綜したものにならざるを得なかったのは，自然の道理ですらあった。

4 ブロムレイのエトノス理論

4.1 エトノス理論にとっての「固い核」とブロムレイの意図

1970年前後に産声を上げ，ソ連解体の時まで勢力を保ったソビエト・エトノス理論とは何であったのかを簡潔に言うのは難しい。ソビエト・エトノス理論を作ったのはブロムレイ１人ではないし，代表格のブロムレイにしても多くの著作があり，それゆえ理論内部での変化が認められる。ブロムレイは，エトノス理論に関連する研究として，『エトノスと民族学』（Bromley 1973），『民族学の現代的諸問題（理論と歴史の概観）』（Bromley 1981），『エトノス理論概観』（Bromley 1983），『エトノス社会的過程――理論・歴史・現在』（Bromley 1987）の４冊をものしたが，本稿では３作目の『エトノス理論概観』を彼の理論的主著と見なし[29]，これに基づいて記述することにする。表１に同書の構成を示す。

最初に想起すべきなのは，ソ連で展開されたエトノス理論は，学界に於いて展開しただけでなく，政策決定や現状評価に当たっての実際的枠組にもなっていた点である[30]。ソ連に於ける民族の研究の重要性は，かの地の民族学の教科書とも言える書に，極めて明瞭簡潔に述べられている。「正しい民族政治を行うこと，それに関連して民族共和国及び州の境界設定の必要性が個々の領域の住民を構成する民族について正しく定めることを必要としている」（トーカレフ 1970：20）。即ち，ソビエト連邦の特徴としての，一定の領土に一定の割合でコンパクトに居住する民族を土台にした民族共和国から成る連邦制という政治体制が，エトノス理論の環境の１つであり，また，不可侵の「固い核」であった。

また，既に指摘した様に，ソ連の学術の「固い核」として，ソビエト社会主義体制を西欧資本主義体制よりも進化した状態と見なす論理の存在が挙げられる。ブロムレイは『エトノス理論概観』の序で，資本主義社会に於いては民族的な敵対関係が認められるのに対し，社会主義社会では，「人類史上初めて，とりわけ先鋭で複雑な問題の１つ，

【表１】 ブロムレイ『エトノス理論概観』の構成

序
第１部　エトノス体系の一般的特徴
　第１章　エトノス問題の概念的・用語法的側面（予備的批評）
　第２章　人間の共通性の基本的類型の特徴付けに向けて
　第３章　エトノスを他の人間的共通性から区分する問題に寄せて
　第４章　エトノスの基本形式　　エトノス共同体のハイアラーキー
第２部　エトノスの基本的構成要素 —— その構造・機能・環境
　第５章　文化とそのエトノス的機能
　第６章　心理のエトノス的特徴について
　第７章　エトノス的自己意識 —— エトノスに固有の要素
　第８章　エンドガミーのエトノス的機能
　第９章　エトノスとその環境
第３部　エトノス社会の人類史の主要な段階
　第10章　エトノス過程の類型化に寄せて
　第11章　人類のエトノス社会的構造と，原始共産的形成体に於けるその動態
　第12章　前資本主義的階級社会に於けるエトノス社会の過程
　第13章　資本主義世界に於けるエトノス社会の過程
　第14章　社会主義世界に於けるエトノス社会の過程
結語に代えて

民族問題が上首尾に解決された」（Bromley 1983：3）と記すが，この視角が「固い核」となっている有様は，この書の第３部の構成（【表１】）を一瞥するだけで察せられよう（本稿1.2参照）。

ところで，根っからのフィールドワーカーで，大きな行政職に就かなかったシロコゴロフと，歴史学出身で所長職にあり，肘掛け椅子型の民族学者のブロムレイとの間には，自身が担おうとする人類学の方向性については奇妙とも言うべき一致点がある。それは強い理論志向である。長年ブロムレイと同僚にあったＶ・Ｖ・ピーメノフは，ブロムレイが所長になった時のことを回想して次の様に述べている。

> ［研究所内には，経験論的研究を行い，具体的に専門地域を選ぶべきだという助言があった：渡邊による補足］だがブロムレイは，独自の道を選択した。現段階にあって重要なのは，新しく経験論的資料を集めることではなく，民族誌学（民族学）の理論的理念を発展させることに精力を注ぐことだと決心した（Pimenov 2003：13）。

シロコゴロフとブロムレイとに共通して見られる学問上の危機意識は，しかし，それを生み出した背景が異なっているし，後者に於いてはソビエト政権からの政策上のプレッシャーがあっただろうと想像できる。ブロムレイはこの辺りのことを明確には語っていないが，だからと言って理論内在的動機が彼になかったということではない。

つまり，ブロムレイにとって「固い核」には，政策科学的要請以外に，ソビエト民族学の学としての維持という要素も存在していた，ということである。ソビエト社会学の「再興」が1960年代になされ，特に「民族（エトノス）社会学（*etnosotsiologiia*; ethnosociolgy）」が誕生した学的環境は，ソビエト民族学の「固い核」自体に進撃し始めたか如き情勢であったからである。

1950年代中葉から歩み始めたソビエト社会学の「再興」過程は[31]，国際社会学会へのソビエトの学者の参加，大学や研究機関，省庁での社会学研究室の設置などを通じ，1966年，G・V・オシーポフ（Osipov）のソビエト社会学会会長への就任，翌年，ソ連科学アカデミーでの具体的社会学研究所（*Institut konkretnykh sotsial'nykh issledovanii*）の創設でもって頂点に達した。ブロムレイが所長になったのは将にこの時である。ソビエト民族社会学の流れを明瞭にサーベイし，自身，研究テーマの文脈でそこに属するG・A・コマローヴァによれば，このとき「ソビエト民族学者はジレンマに立たされていた。現代の研究を放棄するか，或いは社会学者と共同作業するか，というジレンマである」（Komarova 2005：125）。このジレンマは，現代のことを扱うのは諦めて古いタイプの民族学者であり続けるか，民族学者でありながら社会学者と共同研究し，学的刷新を自らに課するか，という二者択一の問いではあるが，ソビエト民族学をどうソビエト社会学から防御するかという問題設定の取り方をめぐる問いでもある。また，ブロムレイはソ連内部の学的情勢だけを見て動いたのでもなかった。西欧での人類学の情勢を彼は，「社会学が，現代を扱う民族学を吸収しようとしている」と観察していたという。具体的にどの様な観察をブロムレイが西欧人類学に対して行ったか詳細には分からないが，程度の問題はあるとは言え，世界的見地から研究対象と学の自立性をめぐる民族学と社会学との攻防戦（当事者からすれば民族学の「固い核」を防御する為の「防御体」の再編）に備え，彼がエトノスの理論的構築の作業に取り組んだことは間違いない。また，ブロムレイが行ったことは理論構築だけではなかった。民族学研究所の組織編成を再考し，研究形態の再編にも乗り出した。「新しい独自の研究領域を持つものとして民族関係の社会学が発展する様に研究所を変える」と主張し，恰も敵陣の主立った武将を味方に付けるが如く，様々な分野の「社会学者」を研究所に招聘した。例えば，農村社会学のIu・V・アルチュニアン（Arutiunian），パーソナリティの社会学のI・S・コーン（Kon），都市社会学のO・I・シュカラタン（Shkaratan），エスニシティや民族関係の社会学のL・M・ドローヴィジェヴァ（Drobizheva）[32]，社会言語学のM・N・グボグロ（Guboglo），現代儀礼研究のL・A・トゥーリツェヴァ（Tul'tseva）といった錚々たるメンバーである。彼ら彼女らの殆どは，1966年に民族学研究所内に創設された「具体的社会研究部門（*sektor konkretno-sotsiologicheskikh issledovanii*，後に民族（エトノス）社会学部門に名称変更）」に属し，研究することとなった（Drobizheva 1998：197–198；Artuinian, Drobizheva and Susokolov 1999：ch.1；

Komarova 2005：126)。

となると，民族（エトノス）社会学がソビエト民族学なのか，それともソビエト社会学なのか，という問いが出てくるかも知れない。一般的に研究対象と手法をめぐってそれが何学に属するのかという問題は本質的には些細なものであるが，本稿では重視し，それはソビエト民族学の一部である，と把握する。その後の影響力を考えれば，社会学よりも民族学に与えた影響の方が遙かに大きいからであり[33]，ブロムレイの意図は，ソビエト民族学に民族（エトノス）社会学を取り入れることで，民族学をソビエト社会学から「防御」することにあったからである。つまり，社会学的影響を「固い核」ではなく「防御体」の処で受け止め，処理し，再編することで，ソビエト民族学を「固い核」として，理論的にも制度的にも維持したのであった[34]。

では，どの様な攻防戦が闘われたのであろうか。

4.2 ブロムレイのエトノス理論の骨格と特徴

ここではブロムレイのエトノス理論の全貌を示すことは出来ないので[35]，エトノス概念の定義と特徴を指示することにしたい。

ブロムレイの言うエトノスとは，次の様に定義されている。

> エトノスとは，所与の領土に歴史的に形成され，相対的に安定した特性を有する言語と文化を共有し，自身の共同性や他の形成体との差異を認識し（自己意識を有し），このことを自称でもって表現する（エトノス名（*etnonim*）を持っている），諸個人の強固な集まりと定義することが出来る（Bromley 1975：11)。

ここからすぐに明らかなのは，シロコゴロフのエトノス論と並べれば一層違いが際だつ様に，エトノスが，(1)「強固な」集まりとして把握されていること，(2) 歴史性に基づく領土が重視されていることである[36]。言語や文化の共有，及び自己意識の存在など，シロコゴロフとブロムレイとの間には共通性も観察できるが，過程を概念の中心においた前者と立場と安定性に着目した後者との間のギャップは小さくない。

確かにシロコゴロフと同じくブロムレイも，エトノスの自己意識あるいは共通意識に大きな注意を払っている（Bromley 1983：ch.7＝1984b：ch.2)。だがブロムレイの場合，共通意識と共同体（*obshchnost'*; community）とは紙一重である。例えば彼は，エトノスの理論的考察をあらゆる共同体の考察から初めているし（Bromley 1983：23)，エトノスとエンドガミーとの関係を扱った初期の論文では，共同体のあらゆる類型のうち，「最も高い婚姻の閉鎖性を持っているのがエトノスである」（Bromley 1969：91）と結論付けている。共同体概念に接近させて共通意識を論じる方向性に，当のエトノスの「強固な」安定性が希求されているのは明らかだろう。即ち，ブロムレイのエトノス概念には，当のエトノスの（シロコゴロフの言う）「結晶化」作用がかなり高めに設定されて

いるという特徴が看取されるのである。この特徴は同時に，領土の重視という点から明らかな如く，ソ連型民族別連邦制という政治体制の特徴と合致するものとなっている。となると，エトノスは所謂「民族」概念と等価か，と疑問が出てくるが，これについては少し後に触れる。

エトノスの「結晶化」作用が高く見積もられているというのは，ある意味では，ブロムレイのエトノス理論が安定志向で，変化が少ない状態を想定しているとも解せる。だが，彼は幾度となく，エトノスをめぐる問いは「静態的にではなく，動態的に」答えるべきだと主張する（Bromley 1983：4，56）。だがここで言われる動態は歴史的な動態であって（Bromley 1983：pt.3参照），シロコゴロフが想定したミクロな変化過程自体の動態ではない。

ところで，資本主義諸国とのエトノス理論上の差異（エトノス論とエスニシティ論との差異）としてブロムレイが先ず指摘するのは，エトノス，及びナロード（*narod*）概念が，多くの西欧側の議論とは異なり，大民族も小民族も指示する点である。西欧ではたいてい，エトノス概念にかなり近い「エスニック・グループ」概念が，小さな集団に対して用いられるのに対し，エトノスやナロードは大小関係なく用いられると言う（Bromley 1983：15-16）。確かに本稿で明らかにした様に，集団の大小に関係なくエトノスを考える基本路線は，シロコゴロフとブロムレイをロシア・ソビエト的伝統として同じ系列にしている[37)]。

「民族」の大小関係なく一括して議論できる上記のエトノス概念の有効性はどこにあるのか。この定義による実践的帰結は，ソ連領土，さらに世界中に居住するあらゆる民族を，エトノスという同じ次元で等価に扱うことが出来るというものであった[38)]。だが，この定義による実際のソビエト民族学は，a民族とb民族との「民族過程（エトノス）（*etnicheskie protsessy*; ethnic processes）」に焦点を合わせた。これは，シロコゴロフが考えた「エトノス過程」と名称は同じこそすれ，その中身は全く異なっている。例えばロシア語とブリヤート語の「民族過程（エトノス）」と言えば，ブリヤート人のブリヤート語母語率とロシア語母語率の数値を調べ，相互作用の度合い（端的に言えば後者の増加）を「民族間関係の発展」と結論づける作業を示していた。このことは，高い「結晶化」作用というブロムレイのエトノス概念の特徴からしても，理解できよう。

では，結局，エトノス概念は，エスニック・グループや民族といった様々な言葉を一括し，実体論的なニュアンスを強く帯びたものというだけの話か，となるが，そうではない。もう少し微視的に観察してみよう。

エトノスの自己意識を指摘する点でシロコゴロフとブロムレイは同じ視点に立っていると先ほど述べたが，違う箇所がある。西側での民族やエスニシティの議論で主観的要素が重視されているとブロムレイは見なし（Bromley 1983：18），ソビエト・エトノス理論をそうした見方に対置する。即ち，「自己意識の共通性だけで社会的共通性を指

摘するのは一面的」であって，「エトノスの自己意識は・・・客観的要素から生じた二次的な現象である」と主張する（Bromley 1983：27, 48）。どういうことなのか。斯くしてブロムレイは，隣接する諸概念を導入するのであるが，その導入の論理的場にこそ，彼のエトノス理論の真骨頂が見られる。

エトノスの自己意識よりも概念の定義上，上位に来る「客観的要素」とは，言うまでもなくマルクス＝レーニン主義に基づく社会経済的要因という発想である。エトノスは，「我々／彼ら」という意識上の弁別だけでもって成立するのではなく，歴史的に実現してきたエトノスは社会経済的要因に依って存在し得た。その形態は，「民族（*natsional'-nost'*）」であり，一定の領土をまとまって占有する存在であった。だが歴史上全てのエトノスが，自ら占有する領土に居住して来た訳ではない。そこでブロムレイは，エトノス概念を「広い意味でのエトノス」と「狭い意味でのエトノス」とに二分し（【表２】【A】），後者を「エトニコス（*etnikos*）」と呼ぶ[39]。領土概念の縛りを持たないエトニコスは全人類をカバーし，どの史的発展段階にでも使える概念とされた（Bromley 1983：59）。

【表２】　ブロムレイのエトニコス概念の他の概念に対する論理的関係

【A】

エトノス概念	（広い意味での）エトノス
	（狭い意味での）エトノス＝エトニコス

【B】

エトノス社会的有機体（ESO）	民族的側面・エトニコス
	社会経済的基盤

また，例えば国家の成立を考えれば分かる様に，エトノスが社会経済的要因を動因として史的に展開するとき，エトノスは独自の実現態を持つに至る。ブロムレイはこの実現態を「エトノス社会的有機体」と名付け，エトニコス概念と峻別する（【表２】【B】）。エトノス社会的有機体は，その社会経済的基盤に応じて，種族，民族（*natsional'nost'*），国民的民族（*natsiia*）の形態を示すという[40]。続けて彼は，エトノス社会的有機体と国家は必ずしも一致する訳ではなく，「同一の国家の中で幾つかの ESO が機能することもある」と述べるが（Bromley 1983：70），これは明らかにソビエト連邦制（無論，これだけではないが）を念頭に置いた言い方である。

こうして見るとブロムレイのエトノス理論は，確かに，V・A・シュニレールマンも指摘する様に（Shnirelman 2005：112），エトノス理論でもってソビエト型民族別連邦制を，当局にも共和国のエリート・知識人[41]にも正統化した。エトニコスは歴史的にも空間的にも至る所に存在し，存在して来たが，徐々に高度な経済力を身に付け，一定の領土を占めるように発展していくと，エトニコスは，エトノス社会的有機体の１つ，国民的民族となって民族共和国を持つことになる，という寸法である。こうした理論展

開には，例えばティシュコフが批判した如く，歴史的超越性の含意を持ってエトニコス・エトノスを実体論的・原初論的に見るアプローチが伏在していることも間違いないだろう。ソ連に於ける「民族間関係の発展」がイデオロギーかそれともロシア化を指すのかはともかく，ブロムレイのエトノス理論は，民族を実体として捉え，そして次にその実体が他の実体とどういう相関関係にあるかに焦点を当てることとなった。ブロムレイの論敵，L・N・グミリョーフは独自のエトノス理論を展開し，「エトノスは，自らの後に考古学上の文化と民族誌学上の遺物を残しながら，消滅していく」と主張した訳だが（Gumilev 1993：76）[42]，こうしてみると，エトノスを変化に富んだ過程と見たシロコゴロフとグミリョーフの近さが気付かれよう[43]。ブロムレイのエトノス理論では，まず実体があり，実体間の相互接触は続くが実体そのものは変わらないという了解があった。共通意識に支えられた実体としてのエトノス概念は，ソ連解体後，本稿で既に見た様に，批判されることになったのであるが，しかしそれがどこまで「批判」たり得ているのかは疑問ということも既述した通りである。

だが話はここで済まない。これまで本稿では，ブロムレイの，乃至はソビエトのエトノス理論に内在する原初論的・実体論的アプローチを指摘して来た。確かに歴史的永続性の視点を見ればその通りなのであるが，微細な意味合いを指摘しない訳にはいかない。ブロムレイに於いてエトノスの永続性を保証するのは，最終的には，エトノスの自己意識のみである。クオリョークも論じている様に，元々の言語が別の言語に置き換わろうとも，固有の領域を失おうとも，「エトノスはエトノス意識が維持する限り持続する」（Kuoljok 1985：26）。既に述べた通り，クオリョークがここで記しているエトノスとは，正確に言えば，エトニコスのことである。ブロムレイは例えば次の様な書き方をしている。「ポーランド・エトニコスは，封建制の時代でも資本主義時代でも存在したし，社会主義時代でも存在している」（Bromley 1983：63）。自己意識でもってエトノスはエトニコスとしてその存在を維持されるのであり，もし自己意識がなければエトノスは単なる「民族学上の形成体（*etnograficheskoe obrazovanie*）」（Bromley 1983：196）という，要するに学者が外在的に研究対象として措定するに過ぎないものになる。では，エトノスの自己意識とは一体何か。

『エトノス理論概観』の第７章は，エトノス的自己意識が集中的に論じられている処である。章のタイトルの副題に「エトノス固有の要素」とあるのはこれまでの記述から頷けるが，私見では，最もブロムレイの立論で読みにくい箇所である。この章では，(1) エトノス的自己意識と言うとき，個人（*lichnost'*；後述）のエトノス自己意識とエトノス共同体のレベルの自己意識を分けて考えなければならない（後者は言語・芸術・法などに表出する，とされる）が，完全に二分するのも不可能であること，(2) エトノス的自己意識にとってエトノニムの意義は大きいこと（エトノニムがある故に，そのエトノスに固有と周囲が感じるステレオタイプが持続しやすく，また逆に，ステレオタイプ

が持続する故にエトノニムの記憶が強固となる）などが論じられて行くのだが，では，どのようにして，エトノスは自己意識されるのかという問いが残ったままである。というのも，先ほど触れた様に，他のエトノスの特徴を受容しても独自のエトノス的自己意識を保つことが出来るとブロムレイは言うからである。この問いに対する彼の解答は，刃こぼれしていると言って良い。

> エトノスは・・・それでも，自らを他のエトノスから区別する際に客観的基礎となる，独自の伝統的特徴を幾つか保持するのである（Bromley 1983：192）。

他のエトノスの特徴を受容してしまった上で意識が存在すればエトノスは維持されると述べつつ，その意識を担保するのは当の自らの伝統的特徴であると論じるのは，第1に，論理としては破綻しており，第2に，こうした伝統的特徴が意識に対して客観的に立ち現れると言うのであれば，エトノニムという名称の次元以外に，その客観性を明示する必要があった筈である。だがこうしたブロムレイの論理的座礁には，別の意義があったと考えるべきである。この点については次に論じ，まずは以下のことを確認したい。

ピーメノフが言う様に（Pimenov 2003：16），エトノス概念の2重構造は，歴史学と民族学の腑分けに対応していた。例えば歴史学は，ウクライナ共和国を有するウクライナ人を，1つの高度なエトノス社会的有機体を持つウクライナ・エトノス（広い意味でのエトノス）として研究するのに対し，民族学はそうした「制限」なく，ウクライナ人やカナダ人，アルゼンチン人を狭い意味でのエトノスとして，つまりエトニコスとして研究すると言う様に，両者の間には，研究対象・手法をめぐって一種の手打ちがなされたことになるのである。柔軟性が高いとも，鵺の様なとも形容できるブロムレイのエトノス理論は，斯くして，ソビエト民族学を防御したのであった。彼が以下の様に民族学の対象を規定するとき，含意されているのはこういうことである。

> 民族誌学（民族学）[44] の定義をめぐる問題に関しては，この場合，当のディシプリン自体が名称でもって研究対象を直接的に示していることを想起すべきである。即ち，エトノスである（Bromley 1984b：129）。

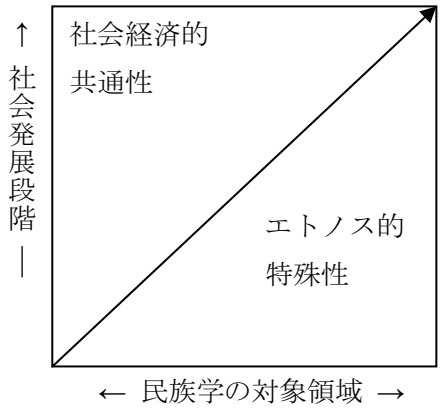
これまで記してきた通り，ブロムレイはエトノスの様相の大きな背景要因として，社会経済的側面を指摘していた。この指摘を形式的に敷衍すれば，同一の自然環境にあって，同レベルの社会経済にいる人間集団は，伝統を同じくするエトノスにならざるを得ない。こうなると余りに機械的な唯物論だが，ブロムレイはこうは考えない。「歴史には偶然が少なくないのは周知のこと」であり，エトノスの多様性という「変種のあり方は何よりも，個々のエトノス集団の文化的伝統の特殊性によって条件づけられて」おり，

「それぞれの民族に於いて人間と自然との相互作用には，独自の固有性がある」とブロムレイは述べる（Bromley 1983：216, 222）。ソ連の教条的公式史観からすれば，「文化的伝統の特殊性」の議論は許容しにくいものであり，ブロムレイの立論からしても論理的不一致となるが，こう述べることで彼は，ソビエト民族学の固有の対象として「文化的伝統の特殊性」をエトノス理論の中に保持したのであった。

4.3 個人という問題構成と民族（エトノス）社会学，そして攻防戦の１つの帰結

ブロムレイの座礁の意義について考えるには，民族（エトノス）社会学とソビエト民族学との関係を見なければならないと私は考えている。クオリョークはその概説書の中でソビエト民族学の対象を，主にブロムレイの議論に依拠しつつ，「主に伝統的な『日常文化』に見いだされる『エトノス特殊的（the “ethnically specific”）』なこと」とし，前階級社会・初期階級社会でエトノス特殊的なことは文化全体に広がっているが，階級社会になると近代化の進展により，物質文化でこの種の特殊性は少なくなり，精神的・心理的領域に見られるようになる，と論じている（Kuoljok 1985：8–9）。これが，ソビエト民族学に於いてまさにエトノスの記述の際に占めていた物質文化論の蓄積の高さを想起すれば，言葉遣いにやや問題含みのまとめであるが，簡潔かつ明瞭な定義になっていることは，本稿でのこれまでの議論から首肯できる。となると，社会主義になってさらに発展段階が進むと，理論上は，エトノス特殊的なことが文化・社会で占める領域は徐々にゼロに近くなる，ということになるが（【図２】），前項で考察した様に，エトノス的自己意識は残るという話にもなっていた。そして実際に，民族（エトノス）社会学は類似した結論を出しつつあったのである。

西欧の「民族関係の社会学」との違いの１つでもあるのだが，民族（エトノス）社会学の場合，共



【図２】 社会発展段階と民族学の対象との相関性

和国の諸民族とロシア人との関係に研究の重心が置かれる点があるゆえ，極めてロシア・ソビエト的色彩が研究対象をめぐって既に存在している感がある。一般的には，この分野の指導的立場のドローヴィジェヴァの定義によれば，「民族（エトノス）社会学は，民族的・社会的・社会心理的諸現象の相関関係や相関関係のメカニズムを研究する」（Drobizheva 1980：171）ものであり，コマローヴァのまとめでは「民族（エトノス）社会学の対象となったのは，社会的多様性に於けるエトノスである」（Komarova 2005：127）となる[45)]。また，ディシプリンの温度差については，「民族学（民族誌学）が例えば，儀礼・家屋のインテリアや外観・食料・家族の民族的特徴といった，民族（エトノス）有機体（ethnic organism）の個々の下位体系をしばしば研究するのに対して，民族（エトノス）社会学的研究は，民族（エトノス）社会的過程（ethno-social processes）に焦点を合わせる」（Drobizheva 1980：172）。当のブロムレイ自身は，この点について，「安定的」で「文化的・生活的特徴」を示すエトニコスと，社会経済的側面という２つの層（【表２】【B】を再度参照）の相関関係が民族（エトノス）社会学の対象となるとしている（Bromley 1984a：31）。民族（エトノス）社会学のこうした特徴とブロムレイのエトノス理論との関係は何を意味するのだろうか。

共和国間の比較を定量的アプローチで行うドローヴィジェヴァの結論は，まとめると次の様になる。

> 専門技術や教育を受けた社会層が成長して，社会階層（socio-class groups）間の類似性が増していることは，様々な諸民族の社会パターンに見られる差異を乗り越える上で大きな意義を有している・・・民族的独自性が消滅しつつあると考えるのであればそれは過度な単純化になる・・・現在の状況では，民族（nationality）は，個人の社会職業的地位に対して実質的な影響をもたらしていない・・・同じ民族の様々な社会集団よりも，様々な民族で成り立っている同じ社会集団の人々の方が，文化的に共通項が多いのである（Drobizheva 1980：177-178）。

つまり，職業観やキャリア・パスなどといった社会的価値志向に於いて，エトノスにではなく，職能によって規定される社会集団に共通性が見られるという結論だが，この結論は，ソ連市民の精神生活には２つの領域があり，一方には日常的な規範・婚姻儀礼・葬式といった処に表れるエトノス的・民族的特徴があり，もう一方には「同じタイプの社会構造」として「イデオロギーや世界観，生活上の価値観」などの「とりわけ積極的な統合性を示す領域」があると言うブロムレイの主張と一致する（Bromley 1984a：35, 43）。

ここに民族（エトノス）社会学の特徴が強い濃さをもって表れている。「民族（エトノス）社会学的アプローチの特徴は，その対象が，エトノス集団の一員としての個人を通して研究される点にある」（Komarova 2005：127）ということは，分析の順序としてエトノスといった集団ではなく，先ず個人を措定し，その個人にとっての共通性を考えた場合，上のドローヴィジェヴァの議論に従えば，エトノスよりも別の社会範疇の方が共通性が高い，と論じるとい

うことである。個人へのこうした着目という問題設定は，民族（エトノス）社会学に特有というよりも，さらに大きな，1960年代のソビエト連邦に於ける人文・社会科学全般に於ける地殻変動によって生じていた故に，ソビエト民族学の攻防戦は熾烈な闘いにならざるを得なかった。

個人[46]への着目という学術上の変化には，純学術上の背景と社会的背景のそれぞれがある。その簡略な哲学史のサーヴェイの中で，R・ザパタは，第20回ソビエト共産党大会以後，徐々に哲学の「復興」が進み，特に1960年代初頭，この動きが加速化したと述べている。「復興」は，マルクス主義哲学の対象をめぐる問いと重なっていた（ザパタ 1997：138）。言うまでもなく，その問いの引き金となったのは初期マルクスの発掘であった。西側では，実存主義や「人間の顔をした社会主義（human-faced socialism）」が疎外概念に注目し，機械論的なマルクス主義でもマルクス＝レーニン主義でもないマルクス主義が盛んに議論された。この路線の社会主義圏からの発信者であったA・シャフが書いている様に，「『草稿』は修正主義者たちのあいだに特殊な反響をみいだしたが，それはマルクス主義の公認のスターリン主義的解釈に反対する闘争の武器としてであった」（シャフ 1976：5）。ソビエト哲学界は西側に対して自らを防衛しなければならなかった訳であるが，西側に「このブルジョワめ！」という台詞の哲学版を吐けば済む話でもなかった。理解の程度や仕方に濃淡はあるにせよ，「『個人は社会関係の総体である』という公式では不十分」であること，「社会的所有の確立および社会主義の勝利とともに，人間の疎外はおのずから消滅するという考えは誤っている」ことがソビエト哲学界で認識されるようになった（ソ連科学アカデミー哲学研究所編 1970：43, 186）。

1960年代のソ連邦で個人の問題が浮上したのは，学術を超えた背景として，1961年の共産党大会で共産主義社会の建設がアジェンダとして提起され，新しい文化の創造なしに社会主義から共産主義への移行は不可能と議論され（Kuoljok 1985：15参照），道徳的規範についてのプログラム化が要請されたからである[47]。その社会的背景としては，当時のソ連で観察され始めた様々な社会問題があり，その結果でありかつ媒体として，ソビエト社会学の「復興」と議論があった。J・ハーンも正しく言及している如く（Hahn 1977：35），1965年，ソビエト社会学が経験論的データに基づいて議論し始めた証拠ともされる著名な論文「青年層のキャリア・パス」をV・N・シューブキンが記している（Shubkin 1965）。その論文では，学歴と卒業後の進路との間に相関性があると論じられ，恰もフランスで生じているが如くソ連でも社会構造の階層別再生産が進んでいる様子が読み取れた。労働者の勤労意欲の低下，労働態度の悪化，アルコール中毒などの社会問題が社会学の対象として否が応でも顕著になっていた。斯くして，哲学に於いても社会学に於いても階級だけではもはや議論が成り立たず，個人が，学術的にも社会政策的にも枢要なトピックになっていたのだが，「マルクス主義社会学の最重要課題は，一般的な社会学の概念から，経験的研究において操作できるような定義へ移行することでもあ

る。『人格』とは，そのような定義にまで高めるのが，きわめて厄介な概念の一つである」（ソ連科学アカデミー哲学研究所編 1970：152）と，概念操作の困難もまた認識されていた訳であった。

個人への関心は民族（エトノス）社会学の民族学化によっても高められた。民族（エトノス）心理学者コーンの議論は，その名称からすると民族毎に異なる心理やメンタリティーがあるとする議論に見えるがそうではない。その様な「古典的民族学と民族社会学」は乗り越えられるべき古い話であって，「個人を歴史文化的に，或いは民族心理的に分類するのは恣意的」と主張していた（Kon 1978）。そしてブロムレイ自身，少し時代が下ってではあるが，1983年6月共産党中央委員会総会での決議を踏まえ，「民族的なるものと民際的なるものが共産主義の建設者としての個人の中でどの様に反映し，この2つの要素が個人の精神世界や実生活の中でどういう位置を占めているのか」をソビエト民族学は問うべきだとし，従来の研究は共和国や共和国間関係のレベルに留まっていたが，個人レベルを（共和国に於ける非基幹民族や移住といった論点をも視野に入れて）重視すべきだとして，民族（エトノス）社会学の研究成果に言及していくのである（Bromley 1984a：24, 28）[48]。

こうしてみると，発展段階の階段を徐々に登るにつれエトノス的特殊性が，ブロムレイの比喩で言えば，「住居自体というより住居のインテリア，衣服自体というより衣服のアクセサリー」（Bromley 1984a：35）という次元で見られるとする議論の帰結 —— 民族文化をめぐるスターリンの定式化「形式に於いては民族的，内容に於いては社会主義的」（渡邊 1999参照）を想起させる —— 結論は，エトノスの私事化（de-publicization）とも言うべき現象を暗示しているのと同時に，エトノス特殊的なことを扱うソビエト民族学の将来的な倒産をも示しているかの様に映ってくる。こういう運命なのも，ブロムレイの論理の破綻ゆえだ，と解釈できるかの様に思えてくる。だがそう考えるべきではない。エトノスが意識される限りエトノスが持続するという破綻的議論は，裏を返せば，意識化の際の客観性となる社会経済的差異がエトノス間の差異として認識されてしまう事態を論理的破綻とする議論でもある。即ち，ブロムレイのエトノス理論は，ソ連民族別連邦制の正統化でありながら，同時に，エトノス理論通りに現実が進めばエトノスは「公」の次元で意識されないのにそれが意識されている，という点を鋭く突くことで，ソ連体制の現実 —— 体制のイデオロギーではなくイデオロギー通りに進んでいないソ連社会の現実（Bromley 1984a：26–27参照）—— を批判する可能性を十分に備えたものだったのであり，正にこの意味で，ソビエト民族学とそのエトノス理論はソビエト体制の産物であった。では，ソ連が解体した故にエトノス理論も終焉を迎えたのか，と問われるのならば，否と答えるべきであろう。というのも，社会経済的差異がエトノス的自己意識に転化する現実は，ソ連体制の専売特許ではないからであり，現実がまだ理論を超えて進んでいないからである。

5 終わりに

本稿の叙述の仕方が，決して，直接的にせよ間接的にせよ，理論の因果関係に焦点を合わせたものでないことに注意されたい。シロコゴロフからブロムレイへ，そしてティシュコフへという風にエトノス理論が単線的に進行していったと解してはならない。歴史家・歴史人類学者のA・グレーヴィチは，こう述べている。

> ［歴史学は：渡邊による補足］「巨視的法則」ではなしに具体的法則性を研究する・・・歴史家に要求されるのは，生起したすべての具体的現象の分析であり，それらの詳細な説明である。そのような接近法をとる場合には，起こりうる歴史過程のヴァリアントは著しく多様であり，その一つひとつがその後の歴史の展開にとってきわめて深刻な諸結果をもたらす，ということを認めるべきなのである（グレーヴィチ 1990：191）。

この立場からすれば，1930年代ドイツでファシズムが勃興した現象は，可能性の1つであったものが現実化したものであって，歴史的必然ではない。歴史叙述に求められるのは，「現実には実現しなかったけれども，一定の現実的諸条件のもとでは起こりえたかもしれない歴史発展のオルターナティヴな形態」（グレーヴィチ 1990：189）を可能な限り隈無く探ることだという彼の視座[49]は，直接には歴史叙述をめぐるものであるが，ロシア・ソビエト民族学の流れを社会的脈絡の中で描く科学誌であろうとする本稿の1つの支えとなっている。理論展開の必然性ではなく，諸々の可能性の連関や布置を重視する記述の方が理論的リアリティに迫れるのではないかと考える。この意味では，アルチュニアン，トーカレフ，コーズロフらによるエトノス論を本稿に組み込み，彼らの立論とブロムレイの議論とを比較検証し，理論発展のあり得た様々なバージョンを想定すべきであったが，それは1冊のモノグラフで行うべき作業であろう[50]。

本稿での試みの1つは，ブロムレイの業績を頭ごなしの否定や忘却から掬い上げることでもあった。従来，彼はその役職も災いして，否定的に評価されて来た。例えば井上（1995b）は，注37で触れた様にエトノス理論の積極的側面を指摘しつつも，ブロムレイを「結果として失敗に終わった民族問題調整の最高責任者」であり，「ソ連民族学を体制の許容する枠内に収めるべく理論的研鑽に努めた人物」と評しているし，また，本稿の一部を口頭発表した時に某研究者は，「ブロムレイは官僚だから」と私の発表をまとめていた[51]。ここで取りこぼされてしまうのは，当の理論に於いて「体制の許容する枠」の内と外との境は奈辺にあるのか，「官僚」ぶりが理論体系の如何なる領域で発揮されているのかに関する洞察である[52]。本稿は，ティシュコフとシロコゴロフの間にブロムレイを定位し，彼の立論とエトノス理論としてのソビエト民族学にとっての「固い核」と「防御体」を精確に見極めようとして来た。確かに「固い核」は固いままであったが，「防御体」はこれまで想定されて来たほど不動であった訳ではなかったのである。

本稿は，記述の体裁としては，ロシア・ソビエト民族学史という学説史を扱ったものであった。とはいえ最後に，他にも幾つか述べることがある。

第１に，シロコゴロフとブロムレイに見られた民族学への危機感は拝聴されるべきである。民族誌的データは，現在，彼らが生きた時代よりも急速に増えているが，それを１人で理論へと統合しようとする意志について，本稿の書き手も含め一度自身の内に問うてみるべきであろう。本稿はその為の準備体操でもあった。今の人類学は危機にない，と誰が断言できるだろうか。

第２に，本稿はある意味で普通の民族誌である。我々の欧米人類学と「異なる」とされるソビエト民族学，特に官製色の強いブロムレイのエトノス理論を，その論理の内部を解析し，概念どうしのネットワークと社会構造との相互関係を可能性を含めて把握することで，理解しようと本稿は努めてきた。ある現象をその周囲の社会構造との連関の中に読み込む点で，その対象が生身の人間であろうと学説であろうと，人類学の企図と知識社会学の企図はそう大差ないのであり（それゆえ両者とも相対主義の難点を抱え込むことになる訳なのだが），また，対象を１つに絞るのではなく複数の対象の相互連関性を議論の根幹に据える点で，機能主義の問題設定を程度の差はあれ宿命とする社会人類学は（渡邊 2004b 参照），民族学と隣接諸科学との関係にも配慮した本稿での記述の仕方と調和し，共鳴しあう筈である。

謝　辞

本稿は，以下の口頭発表を土台にして発表原稿に大幅に修正・加筆したものである。「民族問題の認識論 ── シベリアの現在」（1995年１月21日，中央アジア研究会，東京大学），「ロシア・ソビエト民族理論史点描 ── 人類学的対象の再編成のために」（2001年１月27日，早稲田大学文化人類学会，早稲田大学），「ソビエト社会学史再考（1）── 問題設定に寄せて」（2005年７月30日，本研究会，民族学博物館）。コメントを寄せてくれた方々に感謝したい。なお，文献 Kozlov（2003）の入手については，スラブ研究センターの青島陽子氏の手を煩わせた。ここに記して感謝したい。なお，本研究は，文部科学省科学研究費補助金（2006～2008年度）若手研究（B）「社会的知識の人類学 ── ロシア民族学・ロシア社会学・社会人類学の綜合化の試み」（課題 #18720239）の成果の一部である。

注

1）これは，M・ポランニーの用語であるが，敢えて逆の意味で用いている。彼に於いては（ポランニー 1985），「科学の共和国」の成員資格は科学者のみであって，極めて高い自立性がそこに想定されているが，本論部分で言おうとしているのは，「科学の共和国」とそうでない「共和国」との間の「国境」が想定されている以上に低い，ということである。なお，自立性の謂いとしての「共和国」は古い用法で，ヨーロッパの知識人は自分たちを「書物の共和国」の市民と捉えていたという。この表現自体は15世紀まで遡るが，頻繁に使われるようになったのは17世紀中葉以降のことである（例えば雑誌名『書物共和国新報（*Nouvelles de la Republique des Lettres*）』バーク 2004：51-52）。

2）この辺りの事情を最も劇的に示すのはソ連に於ける精神医学の政治的利用であろう。学術的な描写とは言い難いが，ブロックとレダウェイ（1983）を見よ。

3）1961年に訪ソし，ソ連の社会学者と研究交流を持ったマートンは，ソビエト社会学の公的性格・自立性の低さを指摘した（cf. Hahn 1977：35）。また，別の観点からバーガーとケルナーは，「権威主義的あるいは全体主義的な諸社会における社会学は，自己自身のカリカチュア，知の去勢者になってしまう傾向――あるいは地下に潜行していく傾向――がある」と述べている（バーガーとケルナー 1987：165。強調は原典）。この言い方は少し誤解を招くものである。一度社会学が存在してしまうと，それは彼らが言う，社会的現実の見えない構造を暴くという「破壊的性格」を帯びるのであるから，「カリカチュア，知の去勢者」にはならない筈だからである。本稿がこれから示そうとするのは，そうした破壊力は様々な程度があり，程度を見極めることが研究の課題であって，破壊力があるかないかという議論は避けられるべきである，ということである。

4）ソビエト社会学史は，ソビエト民族学史よりも研究が遙かに進んでいる。特に，Simrenko（1966）及び Weinberg（2004），ロシアでの最近の記述としては Batygin（1998）を参照。

5）だが，極めて不可解なことに，ハーシュはクオリョークの著作に言及していない。

6）K・ヴァーディリーはその社会主義人類学の構想の中で，社会主義体制下の知識人は「必要であるが危険な存在」であると述べているが（Verdery 1991：429），この指摘の具体的帰結を別の言葉で言うとこうなる。

7）本稿では，一括してソビエト民族学という術語で，英米の社会・文化人類学にほぼ対応する学問領域を意味することにする（「ほぼ」のニュアンスを感じ取ること自体が本稿の目的の１つである）。言い換えれば，「民族学（*etnologiia*）」，「民族誌（学）（*etnografiia*）」のどちらを採用すべきかという論点は，特に重要なものとは見なしていない。1920～30年代に於ける両用語の使用の経緯については，Slezkine（1991），Tishkov（1992）が良くまとまっており，詳しくは，ソロヴェイのモノグラフ（Solovei 1998）が全体像を示している。なお，この両用語のズレは，後述のシロコゴロフのそれとは概念的に関係ない。

8）帝政ロシア期シベリア民族学に於ける記述と民族運動との連関については，拙稿（Watanabe 2003）及び Takakura（2006），歴史学・地域研究の立場からの宇山（1999；2005）を参照のこと。また，ロシア・ソビエト民族学に関する大まかな概略については，拙稿（渡邊 2004a）を見よ。

9）この文脈では，Dragadze（1978）も見よ。また，佐々木史郎（1991）は，シベリア民族誌の記述枠組のフォーマットをめぐって，M・G・レーヴィンとN・N・チェボクサロフの議論を仔細に検討している。ソビエト民族理論については，同じく佐々木（1998）も参照。

10）ティシュコフはロシア民族学の批判を英語で多くものしている（先に挙げた文献以外に，Tishkov（1998）がある）。近年では，世界的な政治・社会問題を扱う「公共人類学」シリーズ

から，チェチェン戦争を扱ったモノグラフを出版した（Tishkov 2004）。但し，これが西欧人類学的見地から民族誌であるかどうかは，例えばインタビュアーを現地に派遣するという手法からも，微妙なところである。

11）1990年代，ティシュコフの編集責任の元で一連の『応用・緊急民族学研究』（*Issledovaniia po prikladnoi i neotlozhnoi etnologii*）シリーズ が出版され，ロシア各地やCISの民族問題の現状分析がインテンシヴに推し進められた。1993年から1995年までには，「ロシア連邦における民族自己意識，ナショナリズムと紛争制度化」と題した研究プロジェクトが組織された。現在，民族別のモノグラフのシリーズ（『ロシア人』，『タタール人』，『ブリヤート人』など）が研究所の一大プロジェクトとして刊行中である。

12）シロコゴロフはソ連から亡命し，北京で客死した。

13）中に入る主な術語は「文化」，「言語」である。

14）後に，ユーゴスラヴィアで内戦・「民族浄化」が生じたのは，皮肉を超えているだろう。

15）この考え方は今では研究者に広く共有されたものと言える。ハーシュ以外に，代表的な論考として，Martin（2001）が挙げられる。但し注意すべきなのはハーシュとマーティンとの違いであろう。ハーシュは，マーティンの研究に言及する処で，「ソビエト民族政策は，20世紀のアメリカの人種政策の先行者ではなく，19世紀後半の進化主義的パラダイムのソビエト的脈絡への適応の試みであった」と述べているが（Hirsch 2005: 103），少なくとも民族学史を含むソビエト科学の内在的論理を表現する場合，正論であろう。

16）こうした考え方を採っているロシア民族学者はティシュコフだけではない。V・シュニレールマンの議論（Shnirelman 2005）を見よ。彼の大著（Shnirelman 2001）は，ソビエト・カフカースに於いて，神話としての民族起源が政策的にも学術的にも構築されながら，同時に原初性を帯びていく有様を描いた民族誌（史）である。

17）［ ］は訳者（渡邊）による注記である。

18）1990年前後のこの点に関する議論の最も代表的なものとして，A・ピーカとV・プロホロフの告発的論文「小さな民族の大きな問題」（Pika and Prokhorov 1988）を見よ。

19）ここで，チェチェンと並び，タタールスタンが自治志向の強い共和国であることを想起する必要があるだろう。

20）実際，ティシュコフは，その多くの著述があるにも拘わらず，昨今の政治的・学問的変容を受けた形でロシア民族学の対象を理論的に再規定しようとする作業には，携わっていない。但しこう述べたからと言って，私が本稿でティシュコフの議論を全面否定しようとしている訳ではないことに注意されたい。寧ろ私は高く評価しているが，それはあくまで，現在のロシアの政治思想的言説の布置に於いてのことであって，民族学理論の脈絡に於いてではない，ということである。

21）また，井上紘一（1996）が正しく指摘している如く，シロコゴロフがF・バルトと同じく遊牧民のフィールドワーカーであった事情は看過できないだろう。つまり，農耕民と比べその所有物を原理的には容易に分割できる遊牧民は社会構造として柔軟性を持っており，それゆえ社会的帰属を変更しやすく，成員の自己意識や戦略のレベルに注目せざるを得ない，ということである。

22）訳は一部変えてある。強調は原典による。

23）環境への適応としてのエトノス単位，適応過程としてのエトノスという議論を立てるシロコゴロフにとって，社会構成も適応の結果（それも一時的な結果）である。彼はこう論じている。

　社会構成と云う語は，個体の永続的な集成としての，またそれだけである内部的な均衡関

係（これがその民族［エトノス］単位の再生を可能ならしめ，民族諸単位の生存と存続とを保証するところの経済組織，物質文化及び心意的ならびに心理的活動を維持せしめている）を保っている一複合を形成してゐるものとしての，社会の機能を規制する民族誌的複合を表示する。勿論，社会構成は生存競争をなしつつある民族単位の生物学的適応の所産なのである（シロコゴロフ 1945：8-9）。

24）シロコゴロフは別の所でトゥングース人がキリスト教徒になった事例を挙げている。帝政ロシアはトゥングース人を含むシベリア諸民族に毛皮税（*iasak*）を課したが，シャーマニズムを信じている彼ら彼女らにとって動物を乱獲することは不可能であった。彼らが毛皮税を納めることが出来たのも，「彼らが自分の宗教観念［心理複合］を変化」させたからである，と論じている（シロコゴロフ 1945：17-18）。この辺り，彼流の機能主義が見え隠れしている点が興味深いが，ここでは立ち入らない。

25）シロコゴロフは次の様に述べている。

ツングース［ママ］をエトノス単位として存続せしめることは，彼等が決して外族群団と混血せず，その民族誌的複合と言語とを純粋な形で保持してゐるといふ条件の下に於いてのみ可能である。しかし民族移動の過程から推測され得る限りでは，ツングースの居住地域は遅かれ早かれ隣族の占領するところとなるであらうし，この過程はどうしても阻止出来ないのである。ツングースの絶滅過程は，純粋に経済的並びに非衛生的な条件其他とも，また単に民族活動の作用に過ぎない出生率及び死亡率とも係はりがなく，一民族或いは民族群が近隣民族の圧力を蒙つて衰退する過程の外面に現はれた形態なのである（シロコゴロフ 1945：232-233，訳は一部変えてある）。

シベリア少数民族の絶滅という議論は，19世紀末から続くロシア民族学の１つのテーマであり，また，民族運動や革命思想にとって大きな争点となるものであった。この点については，差しあたり拙稿（渡邊 1995：131）を見よ。

26）この辺りのことは，例えば17世紀の南シベリアに於いて，ブリヤート人がロシア人に朝貢し，エヴェンキ人がブリヤート人に朝貢していた，といった関係を想起すれば分かり易いし，シロコゴロフ自身想定していたのは正にこうした歴史的背景である。

27）少なくとも２つの作業が必須であろう。１つは既に触れたＦ・バルトの「エスニック境界」論との比較検討であり，もう１つは中国民族学・民族政策に於ける民族理論（特に費孝通の議論）との関連性の吟味である。前者についてすぐさま指摘できるのは，バルトの立論が極めて微視的な相互作用論，方法論的個人主義に基づいているのに対し，シロコゴロフの立論は，エトノス理論は集団レベルで構想されており，バルトが念頭に置いた様な，行為者個人が状況に応じて帰属するエスニシティを操作するという次元が考慮されていない点であろう。また，言語的相互関係に着目する視点からではあるが，Ｍ・モアマンが，「エスニック単位（ethnic unit）」は「近隣を含む大きなシステムの一部である」と，シロコゴロフに近い主張をしている点にも留意する必要がある（Moerman 1965：1215）。

28）ミュールマンは，「エトノス（Ethnos）」と「エトニー（Ethnie）」の術語を，「当該の人びと自身が意識し，望んでいるところの確定しうる最大の独立した単位」（ミュールマン1982：79）を表す等価な言い方として用いているので，引用箇所の元は「エトニー」だが本稿に合わせて「エトノス」とした。

29）ブロムレイ自身は，『エトノス理論概観』の序に於いて，最初の２冊が「民族学者向けだとすれば，本書はエトノスの問題に関わる全てのディシプリンの人を対象」とした，と述べている（Bromley 1983：5）。実際に残り３冊は，個別的な論点を扱った論考の論文集という色彩が強い。

30）1917年２月に結成された，「ロシア住民の種族構成研究委員会（*Komissiia po izucheniiu plemennogo sostava naseleniia Rossii*; KIPS）」からソビエト民族学の政策との関係を述べるハーシュは，KIPS に参加していた民族学者（S・F・オリデンブルグら）に，帝政ロシア時代から「科学的統治形態（scientific government）」が望ましいとする見解があり，こうした民族学者とボリシェヴィキとの連携が後のソ連の一支柱を作ったということを述べている（Hirsch 2005：60）。つまり，自らの科学的知見と政治体制のデザインを重ねようとする姿勢には，ソビエト的というだけでなく帝政期の民族学者の志向（つまり，断続と連続性双方）をも読み取ることが出来るのであり，エトノス理論の生成でもって政策と民族学との結び付きが生じたと解してはならない。エトノス理論の体系化はその結び付きを強固にした，ということである。

31）本稿でのソビエト社会学史に関する記述は，主にバティーギンの論文（Batygin 1998）を土台にして進める。

32）彼女は後に，ロシア科学アカデミー社会学研究所の所長へと「再転向」を遂げる。

33）コマローヴァは，民族（エトノス）社会学の民族学への影響を，（1）複雑な社会的文脈を無視して，文化を物質文化と精神文化に分けるソビエト民族学の従来の態度が克服されたこと，（2）現代の民族問題が研究されるようになったこと，（3）過去の遺物の学として民族学を見なす風潮を阻止したこと，の３点を挙げている（Komarova 2005：134）。私もこの整理は同感である。この３点の変化がなければ，後にティシュコフが所長になることはなかったであろう。

34）実際に具体的な研究に携わる研究者にとってみても，民族学か民族（エトノス）社会学かという自分の所属先の問いかけはそう大きなものでなかったと言えるだろう。例えば，コマローヴァが1960，70年代の民族（エトノス）社会学者として言及しているブリヤート民族誌家のK・D・バサーエヴァは（Komarova 2005：128），ブリヤート人の婚姻儀礼研究の大家の１人であるが，彼女の編著書の中には『ブリヤート人の家族的・婚姻的関係の再編（イルクーツク州アラル・オリホン郡の資料による）』という作品（Basaeva 1974）と，1980年には『ブリヤート人に於ける家族と婚姻（19世紀後半から20世紀初頭まで）』（Basaeva 1980）とがある。前者では革命前の「封建的」とされる社会的関係がソビエト時代になってどの様に「再編」されたかが描かれ，他のコルホーズの社会構造の研究論文と並んで，民族（エトノス）社会学的問題関心に沿うものだとすれば，後者は極めて民族学・歴史的な記述となっている。西欧人類学的な言い回しで云えば，前者は研究者にとって，後者で行われた自らの基礎研究に付加される応用人類学的課題に近くなるのであって，革命前の慣習の一部は「遺制（*perezhitki*）」であって乗り越えられるべきものと，記述のフォーマットとして一筆しておけさえすれば，慣習の記述や分析といった研究の取り組み自体にそう違いはなかったことになる。

　またソビエト社会学自体が，民族（エトノス）社会学を自らの守備範囲と見なしていたとは言い切れない。ソビエト社会学の全貌を概観したE・A・ワインバーグは，その研究領域を，（1）労働，（2）社会構造と成層化，（3）結婚・家族・日常生活（*byt*）・離婚・女性の役割，（4）都市の発展・都市計画・都市＝村落関係，（5）犯罪・青年の非行，（6）宗教に分けて描き（Weinberg 2004：ch.5），エトノスや民族をめぐる問題群を排除しているが，これはワインバーグの見落としというより，ソビエト時代そうした問題群が社会学の対象と見なされていなかった，また，ソビエト社会学自体，固有の問題対象をめぐって揺れ動いていた，と考えた方が良い。

35）概観している英語文献として，ブロムレイとコーズロフの研究（Bromley and Kozlov 1989）がある。またブロムレイの主要な論考の英訳（Bromley 1984b）がある。

36）試みにこれを，スターリンの有名な民族定義と比較すれば，民族名称共和国という民族を単位

としたソビエト型連邦制の政治体制と概念設定との近接性が容易に理解できるだろう。なおブロムレイはシロコゴロフについて，「エトノス理論の創造に於いて，最初の根本的な道を開いたとして，たいてい，彼の名が出るのは偶然ではない」と評している。だが，その直後に，エトノスという術語・概念は広まらず，ソ連学界への導入に当たって少なからぬ役割を果たしたきっかけとして，P・I・クシュネル（Kushner）と叢書『世界の諸民族』を挙げている（Bromley 1983：10, 12）。

37）井上はエトノス理論について，「民族をナーツィヤ，ナロードナスチ，部族のように階梯的に捉えるのではなく，その大小や発展段階にかかわりなく，すべてをエトノスの名のもとに対等な集団として措定するという了解である」と解釈している（井上 1995a：619）。この解釈は正しいが，エトノス理論の真骨頂はそこにあるのではない。

38）代表的な研究成果として Bromley（1975）を参照。

39）エトニコスとは，元々は，古代ギリシャ語「エトノス」の形容詞形。

40）発展段階論に即してクオリョークは，種族は原始社会に，民族（*narodnost'*; people）は奴隷制・封建制社会に，国民的民族は資本主義・社会主義社会に特有の存在形態であると論じている（Kuoljok 1985：23）。逆に言えば，ソビエト時代にあって種族・民族・国民的民族という 3 類型はそれぞれ，革命時代直前に当該エトノスがどういう社会経済的基盤の段階にあったかによって，判定される。なお，民族のレベルの表現で，ソビエト民族学では一般的にナロードノスチ（*narodnost'*）とナツィオナールノスチ（*natsional'nost'*）とが登場するが，本稿の枠では違いは無視して良い。外来語の後者の導入に当たってのソ連での議論については Hirsh（2005：111）を見よ。

41）M・バルザーが非ロシア系の民族学者の論集を編むとき（Balzer 1995），(1)「民族史――根源と自己アイデンティティの探求」，(2)「政治人類学――エスニシティ，民族紛争，社会文化的規範の解釈」，(3)「解釈人類学――儀礼や伝統に於ける豊かな民衆的知恵と価値の探求」という 3 部構成にしたのは，「解釈人類学」という名前の付け方の是非はともかく，題名『文化の権化』の付け方とともに正当であった。エトノスの学術的探求と民族別連邦制の維持とのカップリングは特に（1）の分野で生じたのであり，ロシア「ネイティヴ」人類学者の仕事の多くを占めたと言っても過言ではない。

42）因みにティシュコフは，グミリョーフについて，「大衆的歴史家としては才能があったが，理論家としては弱く，民族学者として冴えない」（Tishkov 2005：167）と評している。また，グミリョーフのエトノス論（正確にはエトノス史論）は，当のエトノスの自己意識を重視するが，その色彩は大きく異なる。グミリョーフについては，栗生沢（2007：補論）を見よ。

43）両者とも「生物学的アプローチ」という範疇に入れられることもある。ブロムレイはグミリョーフに於ける非社会学的論調を一貫して批判し，エトノスを恰も「個体群」（population，単なる集合体）として扱うべきではないと言っている。例えば Bromley（1983：20，209–210）を見よ。

44）ここでの「民族誌学（民族学）」という書き方は，ブロムレイ自身による概念の再規定というより，ロシア語を英訳した時に生じた単なる翻訳上のことと考えられるので，違いに拘泥する必要はない。

45）ドローヴィジェヴァは「ソビエトの民族（エトノス）社会学者が行う研究は，『エスニック・グループ』を扱う社会人類学者や西側の社会学者が吟味する問題と近い」（Drovizheva 1980：172）と述べているが，どう近いのかについてはここでは判断を留保しておく。例えば定性的方法といった論点だけでも，彼女が想定するものと西欧で想定されるものの間には違いがあり，この辺りに

ついてのコマローヴァの論じ方（Komarova 2005: 126）も不明瞭な点を残したものとなっている。

46）ロシア語ではリーチノスチ（*lichnost'*）である。この言葉は多くの場合「人格」と訳されているが，少なくとも哲学・人類学・社会学の分野では，「(社会的）個人（person)」，「パーソナリティ」，「行為主体（agent)」といった諸概念とほぼ同じと考えて良い。本稿では差し当たり「個人」としておく。

47）本稿で欠けている重要な作業は，こうした，党大会でのアジェンダと学術上の論点の設定との相互連関を丁寧に跡付けることである。今後の課題としたい。

48）なお本稿では，民族（エトノス）社会学の変化について述べていない。個人の視点は，後に，薄まったと言える。ティシュコフの民族問題研究という問題設定と関連する形になっているが，民族（エトノス）社会学に於けるエトノス間の社会的価値の差異に力点が置かれたドローヴィジェヴァらの経験的研究として，Drobizheva（1998）を見よ。

49）これは，「社会発展の具体的法則性を一般社会学的法則にすり替え，そのなかに，歴史的諸現象の因果関係やその他の形態の相互連関をすべて余すところなく溶かし込んでしまおうとする」（グレーヴィチ 1990: 185）当時のソビエト歴史学への批判でもあった。

50）或いは，ブロムレイの著作を全訳する作業であるかも知れない。彼の理論構築は，先行するソビエト民族学，及び歴史学・社会学・心理学の一部への広汎な批判的注釈を通じてなされているからである。

51）田中克彦（1991）はその著書の中で，2章をソビエト民族（エトノス）論に割き，こう述べている。

> ソビエトの学者たちの，一見定義あさりの空論とも思われる議論にまじってときおり聞かれる，地味な民族学者たちの発言には耳を傾けねばならないのであって，まさにこの点にこそ，我々がソビエトの論争から学ぶべきものが宿されている（田中 1991: 171)。

氏のこの言葉自体に，私は共感を寄せるのに吝かではない（本稿で扱っているブロムレイが「地味な民族学者」に当たるかどうかは別としても，である)。だが田中の叙述は，理論とその環境としての政治体制（連邦制，「ソビエト人」概念など）との関係にしか焦点が当てられていない。また，もっと深刻な問題なのは，「ソビエト科学は，ヨーロッパのマルクス主義が予想もできなかったエトノスの大海の中で，指針にもなりえない貧弱な教条の圧力のもと，社会主義的普遍主義対エトノスという，現代の未踏の問題に挑戦した」という結論などに見られる理論的把握の浅さである（田中 1991: 269)。「社会主義的普遍主義対エトノス」という，社会主義的普遍性と民族的特殊性とを対立させるか如き，しばしば存在する議論や認識を超えようとする処に，ブロムレイのエトノス理論の特異点があることを，田中は決定的に見逃しているし，理論の解析という点で読解力が疑われざるを得ない。

52）私自身，1990年代中葉，ブロムレイを一刀両断しティシュコフに近い見解を取っていたので，本稿は軌道修正を超えて自己批判の性格を持っている。

文　献

（本稿ではロシア語のラテン字表記をアメリカ議会図書館方式に従っているが，英文著作で綴りが別の形で定着している場合にはそれに倣った。例えば，Bromlei ではなく Bromley, Shirokogofov ではなく Shirokogoroff などとしてある。）

Artiunian, Iu. V., L. M. Drobizheva, and A. A. Susokolov（Артюнян, Ю. В., Л. М. Дробижева, и А. А. Сусоколов）

1999　*Этносоциология: учебное пособие для вузов*. Москва: Aspekt Press.

Balzer, M. M.（ed.）

1995　*Culture Incarnate: Native Anthropology from Russia*. Armonk: M. E. Sharpe.

Basaeva, K. D.（Басаева, К. Д.）

1974　*Преобразования в семейно-брачных отношениях бурят (по материалам Аларского и Ольхонского районов Иркутской области)*. Улан-Удэ: Бурятское книжное издательство.

1980　*Семья и брак у бурят (вторая половина XIX – начало XX века)*. Новосибирск: Наука.

Batygin, G.（Батыгин, Г.）

1998　Преемственность российской социологической традиции. В В. А. Ядов（ред.）*Социология в России*, с. 23–44. Москва: Издательство Института социологии РАН.

バーガー，P., H. ケルナー

1987　『社会学再考――方法としての解釈』森下伸也訳，東京：新曜社。

ブロック，S., P. レダウェイ

1983　『政治と精神医学――ソヴェトの場合』秋元波留夫他訳，東京：みすず書房。

Bromley, Iu. V.（Бромлей, Ю. В.）

1973　*Этнос и этнография*. Москва: Наука.

1975　（ред.）*Современныне этнические процессы в СССР*. Москва: Наука.

1981　*Современные проблемы этнографии (очерки теории и истории)*. Москва: Наука.

1983　*Очерки теории этноса*. Москва: Наука.

1984a　Национальное аспекты духовной жизни человека в исторической перспективе. В Ю. В. Бромлей（ред.）*Актуальные проблемы национального и интернационального в духовном мире советского человека*, выпуск 1, с. 23–44. Баку: Элм.

1984b　*Theoretical Ethnography*. Moscow: General Editorial Board for Foreign Publications, Nauka.

1987　*Этносоциальные процессы: теория, история, современность*. Москва: Наука.

Bromley, J.［= Iu.］, and V. Kozlov

1989　The Theory of Ethnos and Ethnic Processes in Soviet Social Sciences. *Comparative Studies in Society and History* 31（3）: 425–438.

Brown, A.（ed.）
2004 *The Demise of Marxism-Leninism in Russia*. Hampshire: Palgrave.
バーク，P.
2004 『知識の社会史――知と情報はいかにして商品化したか』井出弘幸・城戸淳訳，東京：新曜社。
Comaroff, J.
1991 Humanity, Ethnicity, Nationality: Conceptual and Comparative Perspectives on the U.S.S.R. *Theory and Society* 20: 661–687.
Dragadze, T.
1978 A Meeting of Minds: A Soviet and Western Dialogue. *Current Anthropology* 19 (1): 119–128.
Drobizheva, L. M.（Дробижева, Л. М.）
1980 Ethnic Sociology of Present-Day Life. In E. Gellner（ed.）, *Soviet and Western Anthropology*, pp. 171–180. London: Duckworth.
1998 Этническая социология в СССР и постсоветской России. В В. А. Ядов（ред.）*Социология в России*, с. 196–210. Москва: Издательство Института социологии РАН.
Drobizheva, L. M.（ed.）（Дробижева, Л. М.［ред.］）
1998 *Социальная и культурная дистанции: опыт многонациональной России*. Москва: Издательство Института социологии РАН.
Gellner, E.
1980 （ed.）*Soviet and Western Anthropology*. London: Duckworth.
1988 *State and Society in Soviet Thought*. Oxford: Blackwell.
Gumilev, L. N.（Гумилев, Л. Н.）
1993 *Из истории Евразии*. Мосва: Искусство.
グレーヴィチ，A.
1990 『歴史学の革新――「アナール」学派との対話』栗生沢猛夫・吉田俊則訳，東京：平凡社。
Hahn, J. W.
1977 The Role of Soviet Sociologists in the Making of Social Policy. In R. B. Remnek (ed.) *Social Scientists and Policy Making in the USSR*, pp. 34–58. New York: Praeger.
Hirsch, F.
2005 *Empire of Nations: Ethnographic Knowledge and the Making of the Soviet Union*. Ithaca: Cornell University Press.
井上紘一
1995a「ソ連民族理論」梅棹忠夫監修『世界民族問題事典』pp. 618–619，東京：平凡社。
1995b「ブロムレイ」梅棹忠夫監修『世界民族問題事典』pp. 1016，東京：平凡社。
1996 「エトノスをめぐる管見あれこれ」井上紘一編『民族の共存を求めて』第1巻 pp. 111–119，札幌：北海道大学スラブ研究センター。
伊勢田哲治
2003 『疑似科学と科学の哲学』名古屋：名古屋大学出版会。
Komarova, G. A.（Комарова, Г. А.）
2005 Этническая социология как междисциплинарное направление в советской

этнографии 1960-1980-х гг. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 30（1）: 121–139.

Kon, I.

1978 The Self-Image as an Ethno-Psychological Problem. In *Soviet Studies in Ethnography*,（Problems of the Contemporary World 72）, pp. 18–29. Moscow: Nauka.

Kozlov, S. Ia.（ed.）（Козлов, С. Я.［ред.］）

2003 *Академик Ю. В. Бромлей и отечественная этнология: 1960-1990-е годы*. Москва: Наука.

Kuoljok, K. E.

1985 *The Revolution in the North: Soviet Ethnography and Nationality Policy*. Stockholm: Almgrist and Wiksell.

栗生沢猛夫

2007 『タタールのくびき ── ロシア史におけるモンゴル支配の研究』東京：東京大学出版会。

ラカトシュ，I.

1986 『方法の擁護 ── 科学的研究プログラムの方法論』村上陽一郎他訳，東京：新曜社。

Lapidus, G. W.

2004 Transforming the ‘National Question’: New Approaches to Nationalism, Federalism and Sovereignty. In Brown, A.（ed.）*The Demise of Marxism-Leninism in Russia*, pp. 119–177. Hampshire: Palgrave.

Luehrmann, S.

2005 Russian Colonialism and the Asiatic Mode of Production:（Post-）Soviet Ethnography Goes to Alaska. *Slavic Review* 64（4）: 851–871.

Martin, T.

2001 *The Affirmative Action Empire: Nations and Nationalism in the Soviet Union, 1923-1939*. Ithaca: Cornell University Press.

メドヴェジェフ，J.

1980 『ソ連における科学と政治』熊井譲治訳，東京：みすず書房。

マートン，R. K.

1961 『社会理論と社会構造』森東吾他訳，東京：みすず書房。

Moerman, M.

1965 Ethnic Identification in a Complex Civilization: Who Are the Lue? *American Anthropologist* 67: 1215–1230

ミュールマン，W. E.

1982 「民族間体系と民族学」横山廣子訳，綾部恒雄・大林太良・米山俊直編『文化人類学入門リーディングス』pp. 72–93，京都：アカデミア出版会。

Pika, A., and V. Prokhorov（Пика, А., и В. Прохоров）

1988 Большие проблемы малых народов. *Коммунист* 16: 76–83.

Pimenov, V. V.（Пименов, В. В.）

2003 Понятие ‘этнос’ в теоретической концепции Ю. В. Бромлея. В Козлов, С. Я.（ред.）*Академик Ю. В. Бромлей и отечественная этнология*: *1960-1990-е годы*. с. 12–17. Москва: Наука.

ポランニー，M.
1985 『知と存在 ── 言語的世界を超えて』佐野安仁訳，東京：晃洋書房。
佐々木史郎
1991 「アムール川下流域とサハリンにおける文化類型と文化領域 ── レーヴィンとチェボクサロフの『経済・文化類型』と『歴史・民族誌的領域』の再検討」『国立民族学博物館研究報告』16（3）：261-309.
1998 「『民族』解体 ── シベリア・ロシア極東先住民の文化・社会研究の枠組みに関する理論的考察」井上紘一編『民族の共存を求めて』第 3 巻，pp. 64-117．札幌：北海道大学スラブ研究センター。
シャフ，A.
1976 『マルクス主義と個人』花崎皋平訳，東京：岩波書店。
Shanin, Teodor
1984 Soviet Theories of Ethnicity: The Case of a Missing Term. *New Left Review* 129: 113-122.
Shirokogoroff, S. M.（Широкогоров, С. М.）
1923 *Этнос: исследование основных принципов изменения этнических и этнографических явлений*. Шанхай.（отдельный оттиск из т. LXVII, Известии Восточного Факультета Госуд. Дальневосточн. Университета.）
1935 *Psychomental Complex of the Tungus*. London: Kegan Paul, Trench, Trunber.
1945 『北方ツングースの社会構成』川久保悌郎・田中克己訳，東京：岩波書店。
Shnirelman, V. A.
2001 *The Value of the Past: Myths, Identity and Politics in Transcaucasia*（Senri Ethnological Studies 57）. Osaka: National Museum of Ethnology.
2005 Politics of Ethnogenesis in the USSR and after. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 30（1）: 93-119.
Shubkin, V. N.（Шубкин, В. Н.）
1965 Молодежь вступает в жизнь. *Вопросы философии* 5: 57-70.
Simrenko, A.（ed.）
1966 *Soviet Sociology: Historical Antecedents and Current Appraisals*. Chicago: Quadrangle Books.
Skalník, P.
1990 Soviet Etnografiia and the National（ties）Question. *Caihers du monde russe et soviétique* 31（2/3）: 183-191.
Slezkine, Y.
1991 The Fall of Soviet Ethnography, 1928-1938. *Current Anthropology* 32（4）: 476-484.
Solovei, T. D.（Соловей, Т. Д.）
1998 *От «буржуазной» этнологии к «советской» этнографии: история отечественной этнологии первой трети XX века*. Москва: RAN.
ソ連科学アカデミー哲学研究所編
1970 『社会主義と個人』西牟田久雄・笠井忠訳，東京：勁草書房。
Takakura, H.
2006 Indigenous Intellectuals and Suppressed Russian Anthropology: Sakha Ethnography

from the End of Nineteenth Century to the 1930s. *Current Anthropology* 47（6）: 1009–1016.

田中克彦

1991 『言語からみた民族と国家』東京：岩波書店（初出は1978年）。

Tishkov, V. A.（Тишков, В. А.）

1989a О концепции перестройки межнациональных отношений в СССР. *Советская этнография* 1: 73–90.

1989b Народы и государство. *Коммунист* 1, 49–59（後に Tishkov（1997a）に所収）.

1989c О новых подходах в теории и практике межнациональных отношений. *Советская этнография* 5: 3–15.

1991 The Soviet Empire before and after Perestroika. *Theory and Society* 20: 603–629.

1992 The Crisis in Soviet Ethnography. *Current Anthropology* 33（4）: 371–394.

1994 Inventions and Manifestations of Ethno-Nationalism in Soviet Academic and Public Discourse. In R. Borofsky（ed.）*Assessing Cultural Anthropology*, pp. 443–452. New York: McGraw-Hill.

1997a *Очерки теории и политики этничности в России*. Москва: Институт Этнологии и антропологии РАН.

1997b *Ethnicity, Nationalism and Conflict in and after the Soviet Union.* London: Sage.

1998 U.S. and Russian Anthropology. Unequal Dialogue in a Time of Transition. *Current Anthropology* 39（1）: 1–17.

2003 О Ю. Б. Бромлее. В Козлов С. Я.（ред.）*Академик Ю. В. Бромлей и отечественная этнология: 1960-1990-е годы*, с. 5–9. Москва: Наука.

2004 *Chechnya: Life in a War-Torn Society*. Berkeley: University of California Press.

2005 *Этнология и политика: статьи 1989-2004 гг.*, издание второе, дополненное. Москва: Наука.

トーカレフ，S. A. 編

1970 『ソビエト民族学入門』大木伸一編訳，東京：弘文堂。

内掘基光

1988 「民族論メモランダム」田辺繁治編『人類学的認識の冒険――イデオロギーとプラクシス』, pp. 27–43. 東京：同文館。

宇山智彦

1999 「カザフ民族史再考――歴史記述の問題によせて」『地域研究論集』2（1）：85–116.

2005 「旧ソ連ムスリム地域における「民族史」の創造――その特殊性・近代性・普遍性」酒井啓子・臼杵陽編『イスラーム地域の国家とナショナリズム』（イスラーム地域研究叢書５）, pp. 55–78. 東京：東京大学出版会。

Verdery, K.

1991 Theorizing Socialism: A Prologue to the “Transition.” *American Ethnologist* 18（3）: 419–439.

渡邊日日（Watanabe, H.）

1995 「我らの冒険――帝政期ブリヤート社会の構造転換と抵抗様式」東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻提出修士論文（未公刊）。

1999 「ソヴィエト民族文化の形成とその効果――『民族』学的知識から知識の人類学へ」望月

哲男・宇山智彦編『旧ソ連・東欧諸国の20世紀文化を考える』pp. 1–31. 札幌：北海道大学スラブ研究センター。

2002 「移行期社会の解釈から諸概念の再構成へ――ユーラシア社会人類学研究の観察」『ロシア史研究』70：41–61.

2003 On Dynamics of Clan Society and Ethnographic Discourses on Its Reality: The Buriats, Colonial Administration and Revolutionary Ideas in Tsarist Siberia. In K. Inoue（ed.）*Anthropological Perspectives of the North-Eurasian World*, pp. 9–35. Sapporo: Slavic Research Center, Hokkaido University.

2004a「民族学・人類学」『新版 ロシアを知る事典』川端香男里他監修, pp. 732–733. 東京：平凡社。

2004b「全体論・機能主義・批判理論――現代社会に於ける人類学的思考の為に」『社会人類学年報』30：89–119.

Weinberg, E. A.

2004 *Sociology in the Soviet Union and Beyond: Social Enquiry and Social Change,* revised edition of *Development of Sociology in the Soviet Union*. Hants: Ashgate.

ザパタ，R.

1997 『ロシア・ソビエト哲学史』原田佳彦訳，東京：白水社。